

京都府埋蔵文化財情報

第119号

骨を晒し、集め置くこと(上)ー棺と玄室の理解に向けてー	岩松 保	1
共同研究 縄文時代におけるドングリ食		
ードングリのアク抜き実験データからー	増田孝彦・黒坪一樹	13
平成24年度発掘調査略報		21
1. 長岡宮跡第489次・南垣内遺跡		
2. 西村遺跡第2・3次		
3. 向谷遺跡第4次		
4. 長岡京跡右京第1046次		
5. 出屋敷遺跡		
資料紹介 音の考古学ー考古資料としてのびんざさらー	小池 寛	26
研究ノート 桂川右岸地域における古墳時代集落の動向(4)	古川 匠	28
長岡京跡調査だより・115		38
普及啓発事業		40
センターの動向		42

2012年12月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

骨を晒し、集め置くこと(上)

－棺と玄室の理解に向けて－

岩松 保

1. はじめに

横穴式石室などの横穴系埋葬施設から出土する人骨は、棺台や副葬品の出土位置、人骨の遺存状況などから、木棺の位置と数を推定し、被葬者の埋葬順序が復原される。

しかし、その復原の前提には、“個々の遺骸はそれぞれ木棺に納められて玄室に運び込まれた”という暗黙の了解があるのではないだろうか。^(注1)この暗黙の了解が考古学における常識となっているためか、遺体の埋葬方法の詳細や棺の役割・意味については、さほど深く検討されてこなかった。

小林行雄は、横穴式石室内に据えられた箱式石棺から多数の人骨が出土する事例に着目し、玄室内の石棺は「本来、直接に特定の遺骸を収容するために設けたものではなく、石室内に安置した先葬者の遺骨を整理納入して、より多くの追葬者を石室内に収容する目的に使用した」と論じた(小林1952)。

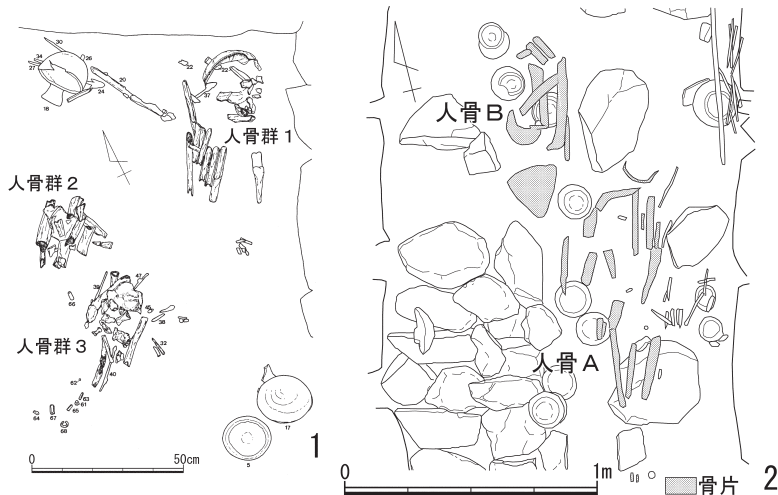
和田晴吾は、古墳の築造から遺体の納棺、その後葺石・埴輪などの整備へと続く葬送儀礼を復原しつつ、古墳時代の棺を“据えつける棺”と“持ちこぶ棺”という視点で分類した。古墳時代後期以前においては、木棺・石棺は玄室に据え付けられており遺骸を納めて玄室に運び込まれていないこと、棺に納められて遺骸が墓所に運ばれるのは7世紀前葉以降の横口式石槨の出現までなかった、と論じた(和田1995)。古墳時代中期以前の竪穴系埋葬施設から後期の横穴系埋葬施設への変化の中に社会や世界観の断絶を設けるといふ従来の考えに疑問を投げた。

この小論では、小林・和田ら先学の問題提議を承けて、従来の棺に対する考えに疑義を挟み、玄室・棺における人骨の出土状況を検討し、玄室・棺の人骨がある段階で動かし置かれたことを明らかにしたい。そしてそのように了解した時、玄室及び玄室内外の棺が人骨を納める場所として、どのような意味を有したと理解できるのかを沖縄県の民俗例をヒントに検討し、集団による玄室の利用形態のあり方について論じたい。

2. 横穴式石室における骨を動かし置く行為

1) 横穴式石室における事例の検討

筆者は、京都府八幡市女谷・荒坂横穴群の調査において、出土状況が分かる人骨21体全てが動かし置かれていることに着目し、従来考えられているような、追葬時に空間を空けるために先葬者の骨が片付けられたのではなく、一連の葬送儀礼の中で骨を動かし置く儀礼がなされたと考えた(岩松・上田2003、岩松ほか2004)。この視点を発展させ、古墳時代後期の横穴内で検出される人骨の事例を検討し、骨を動かし置く儀礼行為が、全国的に執り行われたと論じた(岩松2006)。



第1図 玄室内の骨の出土状況1

1. 京都府城谷口12号墳 2. 広島県梶平塚第2号古墳
(各文献より引用、加筆・調整)

玄室奥の北東部分で3群に分かれて出土した。人骨群1は頭蓋骨を含み、大腿骨が重ねて並べ置かれており、人骨群2・3は頭蓋骨と大腿骨が重なっていた。こういった出土状況から、これらの人骨は改葬されたものと推定されている。6世紀末～7世紀初頭(京都府セ2007)。

事例2 広島県比婆郡梶平塚第2号古墳(第1図) 人骨は2群に分かれて出土した。人骨A群は玄室東半中央に東側壁に沿っており、人骨B群は人骨A群の北西奥壁側に集められている。これらの人骨は骨格の原位置を留めていない。人骨A群は成人頭蓋3、人骨B群は成人頭蓋1が同定されており、その他の骨や歯の出土から、少なくとも成人4体、幼児4体の合計8体が埋葬されたと復原されている。TK209、6世紀末～7世紀初頭(広島セ1997)。

事例3 京都市右京区常盤東ノ町2号墳(第2図) 人骨は2か所で出土した。「奥壁西部の石の上に乗った2個の杯蓋出土地点から約70cm南で、歯の骨が数個出土した。歯以外の骨は見当たらず、顎からはずれたような状態であった。この骨の南50cmの西壁よりの所からは手、足の骨が10数本おり重なって出土した。この骨の中には歯の骨も含まれるが点数は少ない。(中略)これらの手足の骨の南部にも歯、手足の骨などが出土した」と報告されている。人骨の個体数については触れられていないが、「手、足の骨が10数本おり重なって出土」とあることから、複数体の人骨が集められていることは間違いない。TK43～217(京都市1977)。

事例4 京都府木津川市前櫛2号墳(第2図) 棺台R3の上部で、木棺痕の北側で出土した頭蓋骨などの骨、棺台R4・R5の中間部で出土した頭蓋骨及び大腿骨、棺台L3の上で検出した頭蓋骨及び骨盤・大腿骨が出土している。これらは木棺に納められた人骨と考えられている。人骨の性別・死亡年齢は触れられていないが、いずれの人骨も頭蓋骨や大腿骨等の各部の骨が混じり合っていることから、動かし置かれたものと考えられる。TK209(京都府セ1982)。

事例5 京都市右京区御堂ヶ池6号墳(第2図) 玄室には径10cm程度の石で敷石がなされ、奥壁寄りに小石を敷き並べた礫床上で人骨が出土した。頭骨・四肢骨は折り重なっており、1体分の人骨と判断されている。その状況の説明として、①石室構築時の埋葬で後に集骨された、②

その論考では、横穴から出土する事例を中心に検討しただけで、横穴式石室の事例を検討することができなかった。

この小論では、まず最初に、横穴式石室内での人骨の出土状況を検討し、横穴式石室においても骨を動かし置く儀礼が執り行われたことを確認したい。

事例1 京都府南丹市城谷口12号墳(第1図) 人骨は、

後世の石室再利用時の埋葬・集骨の二様の可能性を挙げている。敷石上面の礫床上で人骨が出土していること、再利用に伴う遺物の出土が認められない点から、石室利用時に伴う人骨が動かし置かれたと考えたい。TK217(京大考古研1971)。

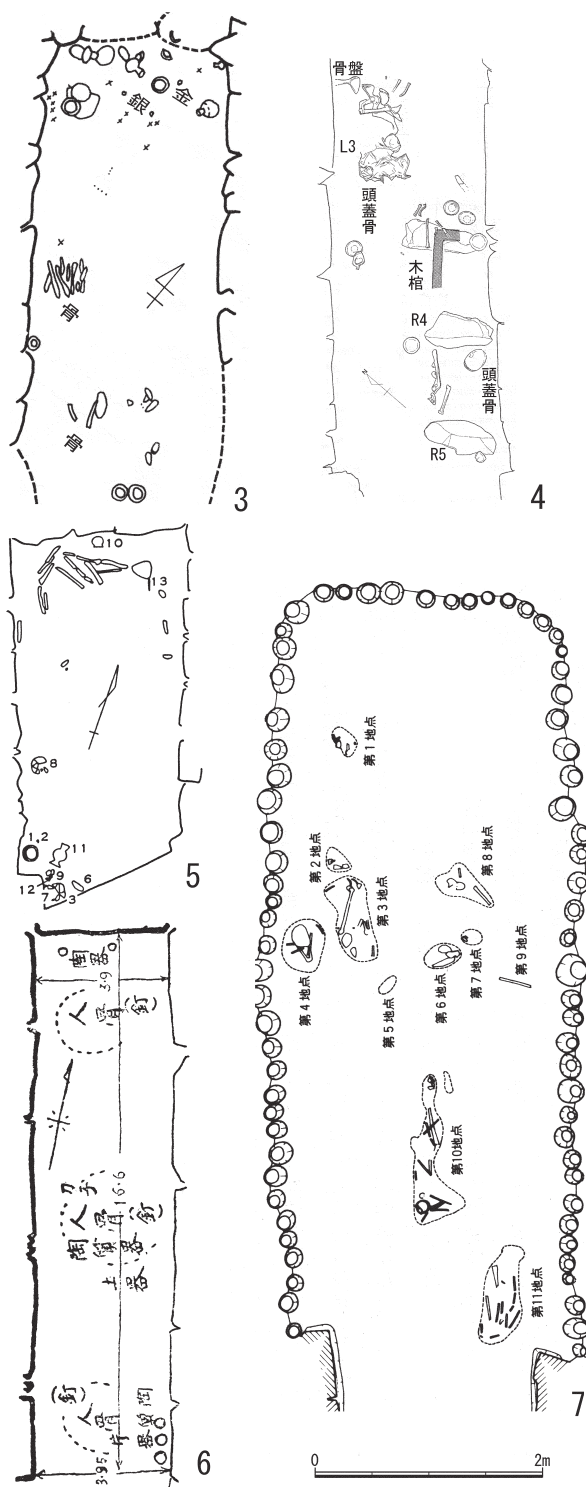
事例6 京都府亀岡市出雲古墳(第2図)

報告書には「遺物ハ凡ソ三ヶ所ヨリ見出サレ、コ、ニ三個ノ遺骸ノ埋葬セラレタルコトヲ察シ得ルナリ」と、3か所で人骨が出土したとある。それぞれの人骨は、土器や鉄器のほか、鉄釘・木炭と共に出土しており、それぞれが木棺に納められていたと推定されている。図面を見ると直径1m程度の範囲で人骨・遺物が出土しているので、人骨は伸展位で出土したのではなく、集骨されていたと推察される。6世紀末～7世紀前半(京都府1925)。

事例7 兵庫県加東郡名草3号墳(第2図)

横穴式木室を内部主体とするもので、人骨は火を受けて焼かれている。人骨片は玄室全体に一様に散布しているのではなく、11か所に分散して出土した。玄室中央部よりも奥壁側の人骨は雑多な骨が不規則に分布しており、個体ごとのまとまりを抽出できないのに対して、第10・11地点は独立したまとまりを示しており、それぞれ、1体、2体の人骨を安置したと推定されている。第10地点では、「奥壁より、すなわち北側に頭蓋冠の破片が、羨道より、すなわち南側に大腿骨、脛骨などの破片が、その中間からは肋骨、胸椎、腸骨の破片が検出されており、胸椎は2～3個の椎体が連結した状態で」ある。第11地点では、「頭蓋骨破片がそのもっとも北寄り」と、ほぼ

中央部の2個所に集中しているので2個体に分離される。すなわち、北側半分には頭を北に向け、身体を南に伸ばしている1体があり、その南には、その下半身があったと思われる所に頭を置

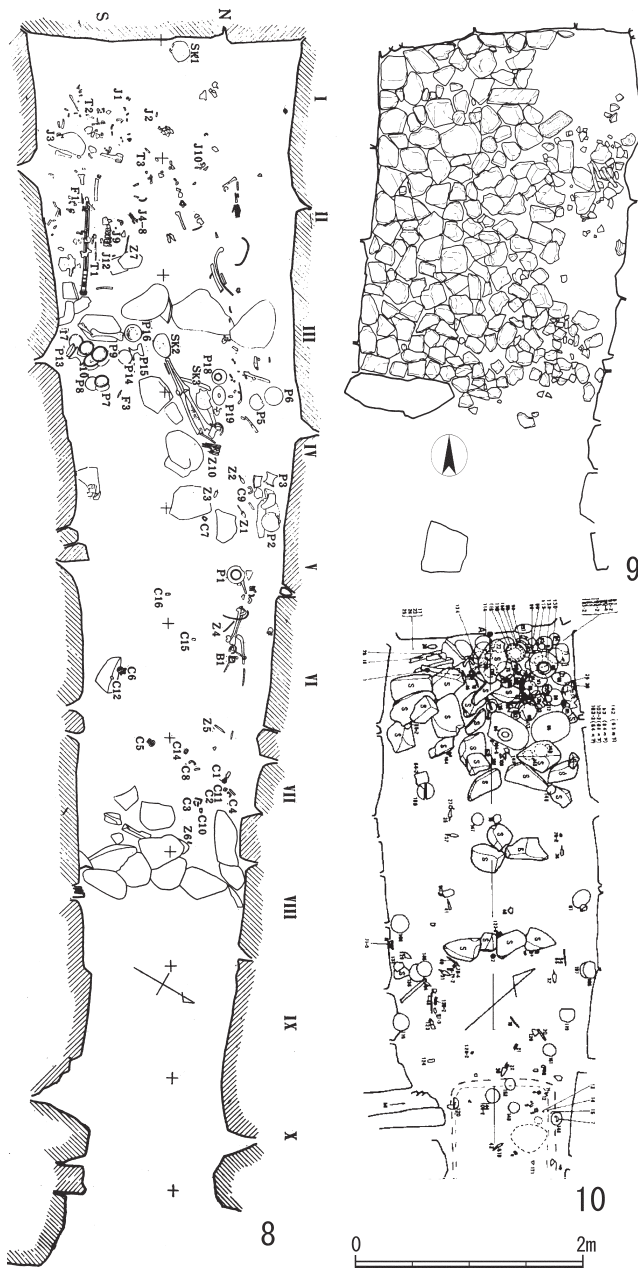


第2図 玄室内の骨の出土状況2

- 3.京都市常盤東ノ町2号墳 4.京都府前柵2号墳
5.京都市御堂ヶ池6号墳 6.京都府出雲古墳
7.兵庫県名草3号墳
(各文献より引用、加筆・調整、3の縮尺は引用者補足)

き下肢を南に向けている1体とがある」と報じられており、最終的には、成人4体、幼児2体の人骨が確認されている。これらの人骨片は、焼けてから動かされたのではなく、火を受ける前に骨単位で動かされている。TK209~217(加東郡1984)。

事例8 京都府竹野郡岡第1号墳(第3図) 玄室全体の数か所で骨が出土している。SK1~3は頭蓋で、SK2からNIV区にかけて6本の下肢骨が並び、中央間仕切りの西側一面に骨片が散らばり、SII区では脊椎骨・腰骨・下顎骨・下肢骨・肋骨が、その南西に小児骨がある。NII区では肋骨・肢骨・手指骨、NVI区では下顎と肢骨が一群となっている。総じて、青年男性1、青年女性3、熟年男性1、幼年1の計6体の人骨が確認されている。TK43~209(京都府1961)。



第3図 玄室内の骨の出土状況3

8. 京都府岡第1号墳 9. 滋賀県太鼓塚16号墳
10. 岡山県空古墳(各文献より引用、加筆・調整)

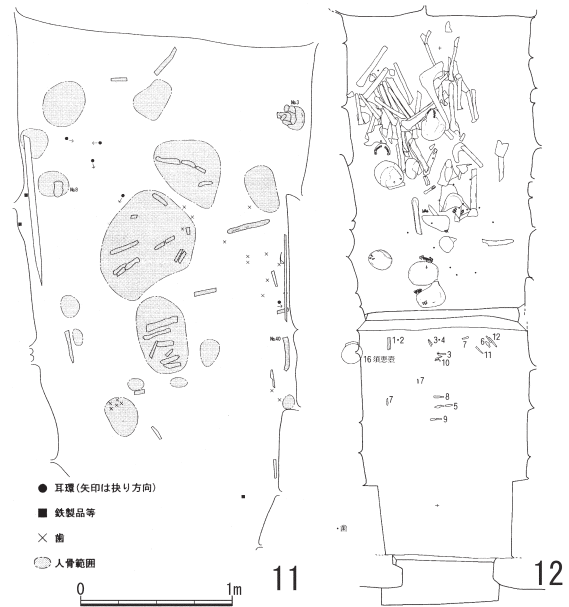
事例9 滋賀県大津市太鼓塚16号墳(第3図) 玄室床面の3/4に敷石がなされており、人骨は土器類とともに右壁に寄せられていた。敷石上の空間には、須恵器杯蓋2が枕のように置かれていた。人骨の性別や人数については触れられていない。TK217(大津市1992)。

事例10 岡山県上房郡空古墳(第3図) 玄室奥に二つの空間が石で造られており、北隅の区画には副葬された遺物が集められていた。西隅の区画(玄室主軸方向0.3m、主軸直交方向0.7m、深さ0.3m)には人骨が集められていた。頭蓋骨1、下顎1、骨盤1、大腿骨6、背骨数個、肋骨10数本、歯牙15本、その他識別不能のもので、識別できたものはいずれも成人のものであった。「大腿骨から考えて3~6人あるいはそれ以上の埋葬遺体を寄せ集めたもの」と報じられている。このほか、羨道部にある土壇内から人骨(大人および幼児)が出土している。6世紀中葉~末(岡山県1976)。

事例11 群馬県多野郡安坪6号墳(第4図) 玄室長2.6m、玄室幅1.7~1.85mで、人骨は玄室床一面に広がって出土したが、一様に広がっているのではなく、まとまりが見られる。それぞれのまとま

りは人骨が集積された状態であった。これらの人骨の最小個体数は9体で、成人男性3体、成人女性4体、6～10歳と1～1歳半各1体と推定されている。6世紀中頃(群馬県吉井町2005)。

事例12 千葉県木更津市俵ヶ谷6号墳(第4図) 前室と後室に分かれており、前室では鉄鏃・須恵器が出土した。人骨は後室に集められており、頭蓋骨とともに多数の四肢骨が重なり、南半部の各所からは歯が出土している。少なくとも成人4体、未成年3体の計7体の人骨が認められた。この事例は、個々の被葬者の骨が個別に集め置かれるのではなくて、複数体の人骨をある1つの場所に雑多に集め置かれるものである。6世紀末葉頃(君津郡市セ1993)。



第4図 玄室内の骨の出土状況
11. 群馬県安坪6号墳 12. 千葉県俵ヶ谷6号墳
(各文献より引用、加筆・調整)

2) 骨を動かし置く行為

横穴式石室においては、石の隙間から墳丘の土砂が流入して玄室が埋もれてしまうためか、人骨の遺存状況は横穴出土の人骨と比べて概して悪い。しかし上掲のように、横穴式石室の玄室床面で人骨がよく残る事例を見ると、骨は1～数か所にまとまって分布し、それぞれのまとまりには全身の骨が混じっており、手脚の長管骨が揃えられているものもある。こういった出土状況から、ある段階で骨が動かし置かれたことは明らかである。

人骨が動かし置かれた状態で出土することは、従来、追葬に伴う片付け——追葬者の遺体を納めるために先葬者の遺骨を整理する、と説明されてきた。この説明では、追葬に伴って片付けられるのだから、“狭い玄室の中には完全な骨格を保った人骨が1～数体横たわり、その横に動かし置かれた人骨が一塊となって見つかる”という情景が期待される。ところが、人骨がよく残る事例においては、石室内の人骨出土状況はすべての人骨が1ないし数か所に集め置かれており、“伸展位で遺骸が置かれてそのまま骨化した”事例は皆無である。^(注2) 追葬者の遺体を納めるために先葬者の遺骨を片付けて、空間を空けたという状況ではないのである。

森岡秀人は、横穴式石室を「次代の家父長の死を契機に再利用」するために「初代家父長を血縁関係のシンボルと仰ぐ縁故集団の追葬活動の完結終焉を明示する」目的で一近親家族分の遺骨・副葬品が片付けられるのに対して、「二世代目の戸主の死を契機に追葬を一旦停止し、新しく古墳を構築するに至った」場合には、遺骨・副葬品は片付けられずに、そのままにされたと考えた(森岡1983)。(骨を片付ける行為は追葬の際に空間を空けるためになされたとは捉えずに、儀礼上・社会上の意味があったものと考えた。) 森岡は、“一斉に片付けられた”ことと“片付けがなされていない石室”があることを指摘するが、この点は筆者の見解と異なるものである。

筆者は、全ての遺骸は骨が動かし置かれており、それはそれぞれの遺骸が骨化した段階で個別

になされたと考えるものである。

これは、被葬者が単数・複数に係わらず、伸展位のままに完全な骨格が残る人骨がほとんど確認できないという事実が認められるということが、そう考える根拠である。

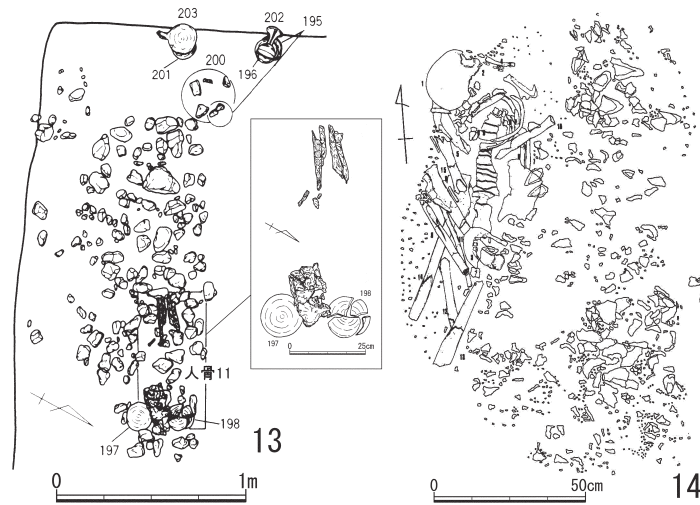
最終埋葬者の骨の状況を個別にみると、ある段階で動かし置かれているものばかりが認められる。事例1～4、6～8、10～13のように、複数体の人骨が出土するものでは全ての人骨が動かし置かれている。事例11の群馬県安坪6号墳(最小人体数9個体)が所在する安坪古墳群では、6号墳を含めて17基の横穴式石室墳を調査し、6号墳以外に8基の石室内で人骨を検出した。うち1基は骨の遺存量が少なく詳細はわからないが、残りの7基すべての人骨が動かし置かれた状況であった。それぞれの最小個体数は、4個体、2個体、3個体、6個体、8個体、5個体、5個体である。また、玄室に1体の人骨しか納められていないものであっても、それが動かし置かれていることは、事例5、後述の事例14から疑問の余地はない。

被葬者が単数・複数に係わらず、最終埋葬者の骨を動かされていることは、追葬という契機とは関係なく、最終埋葬者の骨を動かし置いたと考えざるを得ないのである。

さらに、横穴での事例を見ると、福島県小申田横穴墓群では14体、鳥取県大塔山横穴墓群では18体、福島県駒板新田横穴群では37体、京都府女谷・荒坂横穴群では骨の配置が分かる人骨21体すべてが、自然な骨格配置ではなく、何らかの移動を受けていた(岩松2006a)。このように、骨の遺存状態が良い事例を見ると、ほとんどの骨が動かし置かれているのである。

これらのことから、遺骸の骨を集め置く行為は追葬者を納める段階でなされたのではなく、追葬行為とは関係なくそれぞれの遺骸が骨化した後になされたと考えられるのである。骨を動かす行為は、それぞれの被葬者の“死後の葬儀次第”の中に織り込まれた行為であり、追葬者の有無といった、たまたまの契機でなされたものではないのである。

このように、実際の調査例を検討すると、森岡が指摘するような、一斉の片付け行為は認められないのである。



第5図 玄室内の骨の出土状況5

13. 京都府女谷・荒坂横穴群女谷B支群16号横穴

14. 東京都赤羽台15号横穴墓(各文献より引用、加筆・調整)

そうすると、こういった玄室床面で見られる人骨の出土状況は、どのようなプロセスの結果と考えられるのであろうか。人骨の遺存状況が良好な横穴の事例で具体的に検討したい。

事例13 京都府八幡市女谷・荒坂横穴群女谷B支群16号横穴(第5図) 人骨8～11の4体があり、すべて動かし置かれていた。玄室の南壁に沿って、0.45～0.8×1.75mの礫床があり、その北東部に人骨11

が集め寄せられていた。礫床の北東端には須恵器杯蓋2点(197・198)が伏せて並べ置かれている。これらの上には頭蓋骨・下顎骨があり、南西約40cmに長管骨が長軸を揃えて集められている。2点の須恵器杯蓋は、その上で頭蓋骨が出土したこと、その配置状況と礫床との位置関係から、遺体の頭を置く枕として用いられたと想定される。そうすると、礫床の大きさが成人を伸展位で置ける大きさであることから、当初は伸展位に置かれた遺体が、ある時点で頭側に集骨されたと判断される。TK209(京都府セ2004)。

事例14 東京都北区赤羽台15号横穴墓(第5図) 玄室には1.45×0.9mの貝床があり、その北西部に壮年男性の人骨1体が置かれている。骨の配置状況から、伸展位に置かれた人骨がある時点で頭側に集め置かれた状況が認められる。この横穴では人骨1体しか納められておらず、この周囲に完全な骨格を示す人骨はない。7世紀末～8世紀前半(東北新幹線調査会1989)。

これら横穴の事例から、玄室内に伸展位で置かれた遺骸は、ある程度骨化した時点で全身の骨が頭側に集め置かれたと復原できる。^(註3)兵庫県名草3号墳(事例7)の第10・11地点の人骨出土状況は、伸展位にあった人骨がある時点で集め置かれたことが窺われる。動かし置かれた骨がまとまりをもちつつ玄室内に散在するという状況は、“玄室内に伸展位で置かれた遺骸の骨が、ある段階で頭側に集め置かれる”ことが、被葬者ごとに繰り返された結果と捉えられるのである。

一方、広島県梶平塚第2号古墳(事例2)では2か所に集骨があり、人骨A群には3体の骨が集められている。その出土状況は、個々の被葬者が骨毎に集められている状況ではなく、3体の骨が混然となってまとめ置かれている。京都市常盤東ノ町2号墳(事例3)においても同様の状況が見て取れる。いわば、岡山県空古墳(事例10)の奥壁に接した“区画”や千葉県俵ヶ谷6号墳(事例12)の“後室”の状況が、玄室床面上の小さな範囲に具現しているものと捉えられる。

玄室床面出土の骨のあり方をまとめると、①個々の骨格が頭側にまとめ置かれた、②複数体の骨格が雑多にまとめ置かれている、の2様の集骨がある。これらが同一の他界観念・儀礼の下でなされた集骨行為と捉え、集骨の単複という視点で分類すると、単数の集骨である①のパターンが基本にあり、それを複数体で狭い空間にまとめ置いたのが②のパターンと捉えることができる。

3. 棺の中の人骨の状況

2節では玄室における人骨の出土状況を検討し、通説とは異なり、玄室床面・棺から出土した人骨はすべて動かし置かれていることを指摘した。3節では、玄室内に据えられた棺から出土する骨の状況を具体的に見ていきたい。

1) 多くの骨が集められる事例

まず、棺に多くの人骨が納められている事例を見ていきたい。

事例15 奈良県宇陀郡能峠1号墳奥棺(第6図) 玄室内に奥棺・西棺2基の組合せ箱形石棺がある。奥棺の規模は内法1.28m、幅0.4mで、成人を伸展位で納められない大きさであるが、成人4体分の人骨が検出されている。人骨は、両小口に2個ずつの頭蓋があり、中央部には体肢骨が重なり合っている。棺の規模と人骨の出土状態から、これらの人骨が改葬骨であることは明ら



第6図 石棺・木棺（玄室内）における骨の出土状況
 15. 奈良県能峠1号墳奥棺
 16. 奈良県三塚10号墳石棺3
 （各文献より引用、加筆・調整）

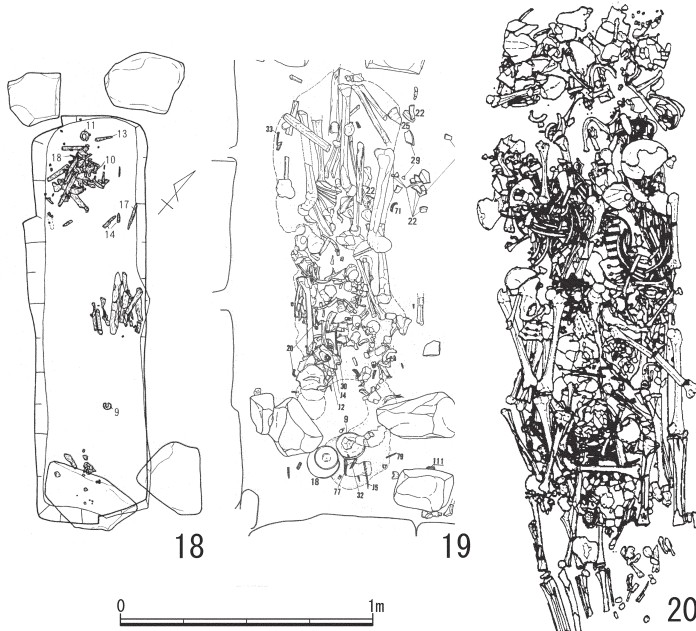
かである。6世紀後半～7世紀中葉（檀考研1986）。

事例16 奈良県北葛城郡三塚10号墳石棺3（第6図） 10号墳は横穴式石室を内部主体にもち、家形石棺1基と石棺2基が造られていた。このうち、石棺3（内法で長0.95m、幅0.4m）から成人と子供2体分の頭蓋骨、長骨の破片、歯が確認されている。10号墳からはTK217～飛鳥Ⅲの土器が出土している（檀考研2002）。

事例17 大阪府東大阪市大藪古墳 横穴式石室の中に石棺が2基あり、北・南棺それぞれの内法長は1.5m、1.2mで、ともに大人を伸展位で納められない大きさである。北棺には5体分の遺骨が頭蓋の頂部を上にして納められており、南棺には成人2体が納められていた。7世紀初頭～中葉（大阪府1978）。

以上は石棺の事例であるが、木棺にも多数の人骨が納められている。木質は遺存していないが、多人数の骨が木棺に納められていた形状を保ったままに出土している。

事例18 京都府舞鶴市三浜丸山1号墳（第7図） 石室内の奥壁近くで検出した木棺で、4石からなる棺台の上で検出した。木棺は棺陥没痕跡を確認し、長さ1.6m、幅0.4mの箱形木棺と想定されている。人骨は棺内の北、中央東側、南側の3か所に耳環・刀子・鉄鏃の副葬品とともにまとめられており、改葬が行われたと考えられている。石室全体を調査していないので、この木棺以外に埋葬施設が有るのか、人骨が玄室床面に分布しているのかについては不明である。TK209～217（舞鶴市2002）。



第7図 石棺・木棺（玄室内）における骨の出土状況
 18. 京都府三浜丸山1号墳 19. 奈良県寺口忍海E-12号墳
 20. 千葉県市宿第10号横穴墓第3号木棺
 （各文献より引用、加筆・調整）

事例19 奈良県北葛城郡寺口忍海E-12号墳A号棺（第7図） A号棺は奥壁沿いに主軸に直交して置かれており、長さ1.9m以上を測る。A号棺には壮年男性2体、若年者、老年女性、幼児の計5体が最少個体数として数えられている。人骨の集積状況は、「多数の破片が重なりあっており、下層には椎骨など比較的小形の骨や歯が多く、上層には頭蓋骨、上下肢長骨など大形の骨が多い。同一個体に属する人骨の右の上腕

骨、橈骨、尺骨が埋葬時の状態を比較的良好に保っている以外、人骨の配列に規則性は認められない」と、完存した人骨配置は認められていない。6世紀後半～7世紀(新庄町1988)。

事例20 千葉県君津郡市宿第10号横穴墓第3号木棺(第7図) 木棺の形状のままに人骨が出土しており、全長2.84m、幅0.57～0.79mの木棺が復原されている。内部からは乳児から

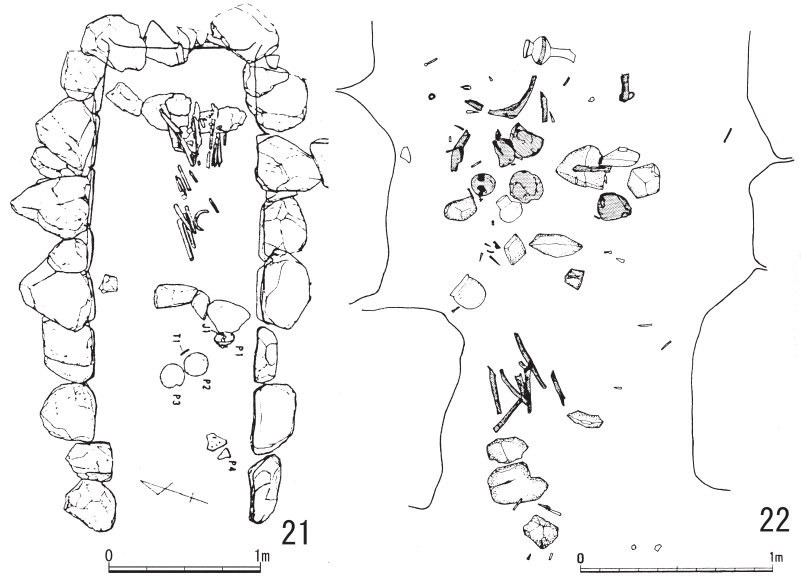
壮年後半～熟年の男女までの12体分の人骨が出土しており、いずれも頭位を揃えて仰臥伸展位である。このうち3体程度は解剖学的な位置を留めていないが、他のものはある程度解剖学的な位置を留めている。第10号横穴墓にはこの他3基の木棺が据えられており、第1号木棺には6体、第2号木棺には7体、第4号木棺には6体分の人骨が出土した。この横穴墓から6世紀末～7世紀第3四半期の土器が出土した(君津郡市セ1996)。

事例21 奈良県天理市龍王山B-1号墳(第8図) 玄室長2.7m、幅1.1m、羨道幅0.9mの横穴式石室の中央部から奥壁部にかけて、人骨が集中して出土した。人骨は、成人男女各1体、小児1体、幼児1体からなる。人骨の出土した近辺に棺台と推定される石が配置されていること、鉄釘が出土していることから、木棺に納められていたと推定されている。棺台の配置から長さ1.6m程度の木棺があったと復原できる。6世紀中～後半(檀考研1993)。

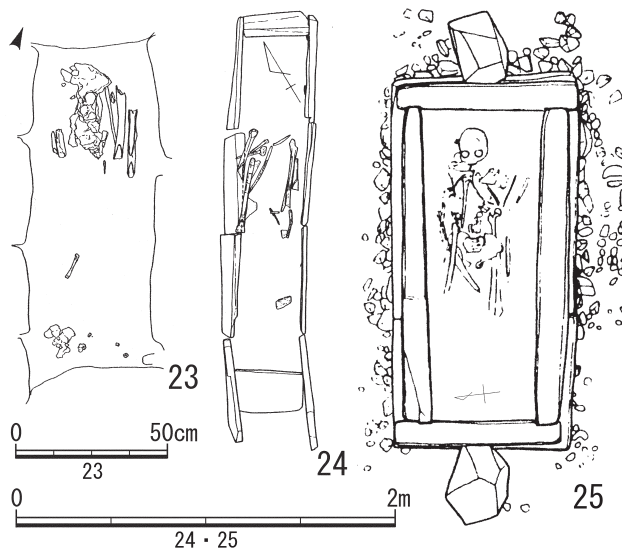
事例22 奈良県桜井市忍坂第2号墳(第8図) 玄室中央部から羨道部で頭蓋骨5個体のほか、大腿骨や脛骨などが出土している。人骨群の下には川原石があり、棺台として用いられたと推定されている。また、周辺には鉄釘が散乱しており、人骨や棺台の石の分布範囲から、2m程度の木棺に納められていたと考えられる。6世紀末～7世紀に築造され、7世紀後半まで追葬(奈良県1978)。

これらの事例より、玄室内の棺に多数の人骨が納められている場合があることは明らかである。小林行雄は、玄室内の石棺は特定の遺骸を納めるものではなく、先葬者の遺骨を整理納入して、より多くの追葬者を石室内に収容するために使用したと考えた(小林1952)。和田晴吾は、古墳時代後期においては遺骸が木棺に納められて玄室に運ばれて安置されたのではなく、玄室に据えられた棺に遺骸が納められたと指摘した(和田1995)。

玄室内の棺には特定個人が納められた、と暗黙的に考えられているが、玄室内の棺は個々の被



第8図 玄室内の骨の出土状況6
21. 奈良県龍王山B-1号墳 22. 奈良県忍坂第2号墳
(各文献より引用、加筆・調整)



第9図 石棺・木棺（玄室内）における骨の出土状況
 23. 奈良県三塚古墳群小石室 11
 24. 奈良県能峠1号墳西棺 25. 京都府堀切谷第6号横穴
 （各文献より引用、加筆・調整）

た。また、全身の骨が見つかったわけではなく、一部の骨しか出土しなかったことから、さらし骨となったのち、いくつかの骨が選ばれ石室内に埋葬されたと考えられる。すなわち改葬墓であると判断できる」と報じられている。飛鳥Ⅱ（榎考研2002）。

事例24 奈良県宇陀郡能峠1号墳西棺（第9図） 棺は内法で長さ1.97m、幅0.35～0.38mと遺体を伸展位で置くことができる大きさである。人骨の配置は、「棺中央部で長管骨・腰骨のあたりを検出したにとどまる。鑑定によれば、成人男性の可能性が高い」と報じられており、動かし置かれた骨と判断される。6世紀後半～7世紀中葉の間（榎考研1986）。

事例25 京都府京田辺市堀切谷第6号横穴（第9図） 横穴の玄室内に組合式家形石棺（内法で長さ1.6m、幅0.55～0.62m、高さ0.45～0.48m）が納められており、内部に成年男性と推定される1体分の人骨が遺存していた。調査者の高橋美久二は「人骨は頭蓋骨と骨盤の位置が適当なので、一見したところ仰臥で葬られたように見えた。下顎骨、肩甲骨、上腕骨、腰椎骨、大腿骨などの大きな特徴のある骨はそれらしい位置にあるが上下、左右の向きや表裏が適当でなく、大腿骨の一方は骨盤の上に一方は下にあった。肋骨、脊椎骨など数の多い骨はあちこちに散在しており、その他細かい骨とかとくちょうをつかみにくい骨は北壁の方にまとめて置いてあった」と記されており、「遺骸を石棺に納めてから白骨化したものではなく、どこかで白骨化したものを納棺したと考えられる」と結論づけている。TK209～217（京都府1969）。

事例26 奈良県北葛城郡寺口忍海E-12号墳（第10図） 石室内の5か所に木棺が配置された状況で骨が検出されている。A号棺は事例19で先述したように、1.9m以上の木棺に5体以上の被葬者が推定されている。B号棺は棺の長さは不明であるが2体、C～E号棺には1体ずつが葬られたと考えられている。C・E号棺の骨の出土状況を見ると、C号棺は長さ1.9m前後で、「頭蓋骨、椎骨、肋骨、左右上腕骨など、上半身の骨は埋葬時の位置にとどまっているが、下肢骨は

葬者に帰属するアイテムではなく、棺内に葬られた人々全体で共用するものであったのである。

2) 1体の骨が納められる事例

事例23 奈良県北葛城郡三塚古墳群小石室11（第9図） この小石室は、長さ2.6m以上、幅0.95～1m、高さ1.1mの小横穴式石室内にあり、長さ1.1m、幅0.3～0.36m、高さ0.36mである。残存する骨が重複しないことから、1体分の人骨と判断され、壮年後半～熟年前半の女性の骨である。「出土時、鎖骨、肋骨、腰骨、長骨が石棺の奥に一箇所に重なるように集まり交連状態になく、頭蓋骨は石棺の南付近に位置してい

原位置から動いているものが多い」とあり、E号棺は長さ1.7 m以上で、「破片数は最も少なく、すべての骨は埋葬時の位置から移動しているが、頭蓋骨や上肢骨の破片はC号棺より、下肢骨の破片は羨道よりに散布している」と報じられている。これらの棺はそれぞれ1体しか納められていないが、骨は動かし置かれた状況である。6世紀後半に築造、7世紀代に追葬（新庄町1988）。

3) 棺に納められた骨

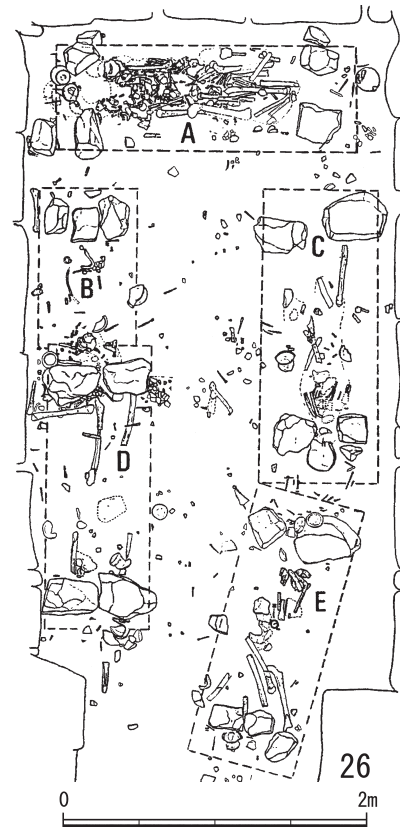
上述のように、骨の遺存状況が良い事例を見ると、玄室内の棺から出土する人骨もまた、玄室床面から出土するものと同じく、ある段階で動かし置かれた状況を示している。これには、被葬者の数に単数・複数の別がない。“追葬として新たな遺骸を棺に納め置く際に先葬者の骨を動かし置いた”という従来の“追葬に伴う片付け”という考えでは、少なくとも最終埋葬者は片付けられる必要がないのだから、必ず完全な骨格を示していなければならない。しかし、単数埋葬であっても、複数埋葬であっても、最上位の被葬者の骨が動かし置かれているという事実が認められることから、“埋葬後に骨が動かし置かれて出土する”という事実に対して、片付けという解釈は成り立たない。

すると、どの時点で骨が動かし置かれたのであろうか。視点を変えて棺の大きさに着目すると、古墳時代の成人男性の身長を1.63mとした場合（池田1993）、被葬者の身長よりも小さな棺（事例15～18・21）と大きな棺（事例19・20・22）がある。前者は、遺体を伸展位で納められないことから、遺骸をそのまま棺に納めたのではなく、他所で骨化した骨を納めたと判断できる。こういった事例が多く認められることからしても、当時の埋葬は遺骸を棺や玄室に納めて完了するという一回だけの行為であったのではなく、骨を晒した後に骨を動かし置くこともまた埋葬行為の中に織り込まれていたことが分かる^(注4)。

一方、棺の長さが被葬者を伸展位で納めるのに十分な大きさである場合は、棺内に遺骸が置かれてそこで骨化した後に骨が動かし置かれたのか、それとも他所で晒された骨が納められたのか、判断が難しい。

被葬者の身長よりも十分に大きい棺でありながらも、すべての人骨が動かし置かれているという状況を説明できる仮説としては、棺に伸展位で遺骸を納めた後に、

- ①追葬者の有無に関係なく、ある段階で被葬者毎に骨を動かした
 - ②最終の追葬を行う時にその遺骸を含めてそれ以前の被葬者の骨をすべて動かした
- というものと、



第10図 玄室内の骨の出土状況
26. 奈良県寺口忍海E-12号墳
（文献より引用、加筆・調整）

③棺の長短に係わらず、遺骸を他所で骨化して晒し骨を棺内に納めた
の3様が想定できる。

①は、追葬者の有無に係わらず行われることから、死者本人のために行われる行為と判断される。その死者が刻む“死後の時間”の中で時機を得て行われるものである。②は、最終埋葬者だけが納棺時に骨を動かし置かれるという点で、それより前の被葬者に対する扱いと異なることが説明しがたい。③は、必ず動かし置かれた骨が出土することとなるが、棺が伸展位で納めることのできる大きさであるにも係わらず、なぜ完全な遺体を伸展位で納れずに晒し骨を納めたのか、という点が説明しがたい。

②、③である可能性を完全には否定できないが、以下のように、玄室床面における人骨の移動状況との整合性を考えた時、①の可能性が高いと考えたい。

玄室床面の人骨では、玄室床面に置かれた遺骸がその場で頭側に動かし置かれる場合と、玄室内のある場所に集め置かれる場合(事例2のように床面上でのある2か所、事例10・12のように奥壁に接した区画や後室など)とが想定された。これらの想定に準拠して棺内の人骨を解釈すると、“その場で頭側に動かし置く”が、“身長より長い棺内に伸展位で納め骨化した後に骨を動かし置いた”に対応し、“ある場所に集め置く”が、“玄室床面で骨化した骨を身長より短い棺の中に納め置いた”に対応すると考えることができる。

このように解釈すると、玄室床面における人骨の移動状況と石棺における行為とが整合性を有することから、①の行為がなされた蓋然性が高いと考える。

伸展位で納めることのできない棺では、最初から晒し骨を納れることが決められており、伸展位で納めることができる棺では、棺内に遺骸を納め骨化した後に骨を動かし置いた可能性が高いと考えたい。(以下、次号)

(いわまつ・たもつ=当調査研究センター調査第2課調査第2係長)

注1 筆者の理解もこの考えを超えるものではなかった(「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡 川向1号墳」『京都府遺跡調査概報』第39冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1990)。

注2 これについては、筆者の勉強不足ということもあり確実とは言えないが、小論中で掲げた事例を見る限り、通有に想定されているほどには存在しないと考える。

注3 先の論考では、2種類の集骨(集骨A・B)が認められたことから、第1回目は、横穴の玄室に死骸を納めた直後に死者が生き返らないために骨が動かし置かれ(集骨B:事戸度し儀礼)、死後数年経た後に、その死霊が祖霊の仲間入りをしたと判断された時点で、再度骨が動かし置かれた(集骨A)と考えた(岩松2003・2004)。横穴式石室においては、一般的に骨の遺存状況が悪いため、集骨Bに相当する人骨は確認していない。以下の内容は、集骨Bの儀礼がないものとして記述している。

注4 小論では触れていないが、同様のことは陶棺でも言える。陶棺の大きさは、内法長が0.5m内外～2.3m内外のものが主であり、到底遺体を伸展位で納めることのできないものもある。石棺と同じく、一旦、遺骸を骨化させた上で、晒し骨を陶棺内に納めたと判断されている(吉岡博之「北平尾古墳発掘調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 長岡京跡発掘調査研究所 1979)。

縄文時代におけるドングリ食

－ドングリのアク抜き実験データから－

増田孝彦・黒坪一樹

1. 今回の目的

筆者らは先に、ドングリを縄文時代の主食に近い食材と位置付け、その通年利用の実態を追求しようとアク抜き実験に取り組んだ^(注1)。ほとんどのドングリには非常に強いアクがあり、そのままでは食することはできない。アク抜きの方法として、民俗事例から水さらしによる方法と、加熱による方法が代表的なものとして知られている^(注2)。そこで水さらしと加熱によるアク抜きを行い、縄文時代人がドングリを食べられるまでの工程を考えた。使用したドングリは、遺跡からの出土例もある落葉広葉樹のコナラ、クヌギ、常緑照葉樹のアラカシの3種である。その結果、民俗事例では加熱によるアク抜きがほとんどとされるコナラについても、水さらしで十分にアクが抜けることを確認した。実際、3種のドングリともアク抜きの工程が進むにつれ、苦味・エグ味が薄れていくのを味覚により感じる事ができた。

そして、今回の目的は、上記実験の過程をもう一度正確に辿り、アク抜き作業による実際のアクの減少や、アク抜き前と後での栄養価および熱量(kcal)の違い、さらに低湿地貯蔵穴を模した状況でのアク抜き効果などを計測数値により示すことにある^(注3)。調査の結果、味覚と数値の見事な一致や、貯蔵穴を考える上で興味深い結果も出た。順を追ってみたい。

なお、本稿は平成22・23年度の2か年にわたる当調査研究センターの共同研究「ドングリ食の復元と縄文人の通年利用戦略」の成果をまとめたものである。

2. アク抜きの過程

ドングリの場合、苦味・エグ味のもとであるアクの強弱は、タンニン酸の含有量(以下、タンニン量)によるものである。そこでアク抜きの処理前と後で、タンニン量の計測を行った。ドングリの種類やアク抜き方法の違いにより、タンニン量はどう変わるのか、ドングリの種ごとに計測値を列記し(付表1)、そこからいくつかの問題点を抽出したい。

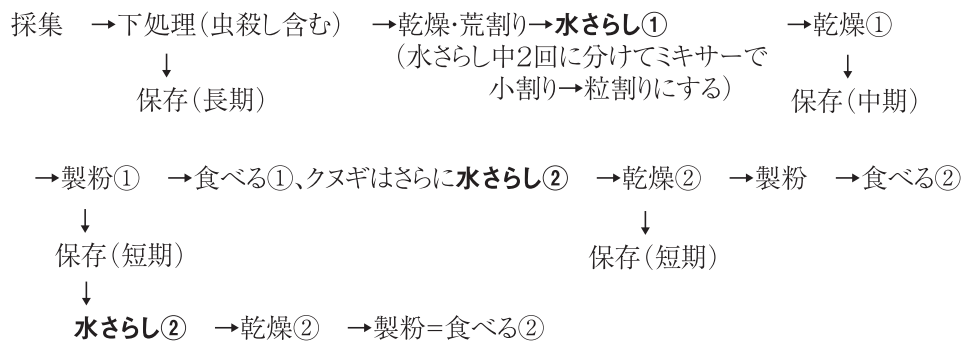
アク抜き処理に入る前の生の果実100g当り(以下同じ)のタンニン量は、コナラが5.98g、クヌギが4.62g、アラカシが5.59gであった。3種のなかではクヌギがもっとも低く^(注4)、コナラ、アラカシがより高い数値を示している。カシ類はナラ類と比較してタンニン量は少ないと考えていたが、ここではナラ類と遜色のない高い含有量となった。

それでは水さらしによるアク抜きからみていく。

①水さらし

実験による水さらしの工程は、以下の手順に示すとおりである。

このなかで、中間段階の**水さらし①**、そしてアク抜き完了と判断した**水さらし②**の段階を経て



乾燥させたもので、それぞれのタンニン量を計測した。

水さらし①では、コナラ0.99 g、クヌギ1.69 g、アラカシ1.91 gでタンニン量は激減している。食可能となるのは1 g以下とされるので、コナラについてはほぼ抵抗なく食べられるまでアクはなくなっている。

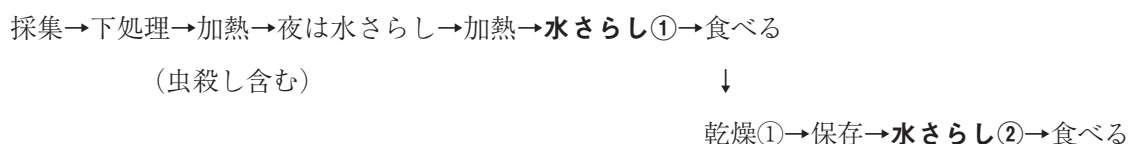
さらに、**水さらし②**の段階には、コナラ0.95 g、クヌギ1.35 g、アラカシ1.37 gとなった(付表1上)。いずれも1 g前後となり、工程が進むにつれて確実にアク(タンニン量)は減少している。クヌギ、アラカシについてもほぼ食べられるほど、アクは軽減したといえる。

ここで指摘すべき点が2つある。一つは、コナラ、クヌギ、アラカシとも水さらしのみで十分アク抜きは可能であるということである。民俗例によると、すべてではないにしろ、コナラなどの落葉広葉樹ナラ類のドングリは、加熱(煮沸を含む)によるアク抜きが主であるのに対し、アラカシなどの照葉樹カシ類については、水さらしによるアク抜きが主とされる。しかし、ナラ類であるコナラも水さらしによる方法は有効であることがわかった。

もう一つの点は、一般に落葉広葉樹のナラ類より照葉樹のカシ類のほうがアクは少ないとみなされているが、アラカシのタンニン量はコナラとほぼ同じくらい高い含有量を示していることである。しかも、**水さらし①**においては3種のなかでアラカシはもっとも数値が高く、最終工程の**水さらし②**にいたってもその傾向は変わらなかった。今回の数値で見ると、アラカシはコナラ、クヌギと比較してアクが抜けにくい種類の果実といえそうである。

②加熱

実験による加熱の工程は次のとおりである。



今回、民俗事例から加熱によるアク抜き処理の事例がほとんどないアラカシについては計測を行っていない。しかし、縄文時代にカシ類の加熱処理がなかったとはいえ、アラカシの加熱処理後のタンニン量の推移もいずれ計測しておく必要がある。

加熱による方法は、水さらしと比較してアク抜けまでの時間が非常に短いことがあげられる。加熱を開始して、1時間に1回の水換えをやりつつ、2日間計14時間の加熱処理でほぼアク抜きは完了する。さらに水さらしと加熱処理には大きな違いがある。加熱処理によるアク抜きでは、水さらしのようにドングリを粉にする必要はなく、最終段階の2日目(14時間)の加熱を終えるころには外皮が膜状になり、中がポソポソに、さらに加熱すると「ドロドロの小豆色の餡状」になる。ドングリを磨り潰す製粉具の磨石と石皿は、こと加熱によるアク抜き作業においては必要としないと言えそうである。

水さらし・加熱

	果実(処理前)	水さらし①	水さらし②	加熱
コナラ	5.98	0.99	0.95	0.23
クヌギ	4.62	1.69	1.35	0.81
アラカシ	5.59	1.91	1.37	—

水漬け容器内におけるタンニン量変化

	果実(処理前)	容器内水漬け	
		殻付のまま	殻は除去
コナラ	5.98	5.14	3.98
クヌギ	4.62	4.8	4.56
アラカシ	5.59	7.76	6.01

(数値の単位は g/100g、FOLIN - DENIS 法 タンニン酸として)

付表1 アク抜き(水さらし・加熱・水漬け)によるタンニン量変化

ここでもタンニン量100gあたりの数値を確認しておく(付表1上)。加熱2日目を終えた段階では、コナラ0.23g、クヌギ0.81gとなった。タンニン量の減少は凄まじく、特にコナラは非常に低い値となった。ドングリを採集し、できる限り早く食するには有効な処理方法といえる。

加熱処理しドロドロになる前のドングリは、視覚的にも、水さらしで時間をかけて処理したドングリの状態とは明らかに違う。デンプンなどの成分が熱により変質している。

3. 栄養成分・熱量(kcal)

ドングリの状態が視覚的に大きく変化する加熱によるアク抜き法は、水さらしによる方法と比較して、栄養素・熱量(kcal)において差が生じているのではないか。この点を確認するため、加熱処理の民俗事例が多いコナラとクヌギについて3大栄養素(たんぱく質・脂質・炭水化物)および水分、灰分の成分分析と、熱量(kcal)を計測した(付表2)。アラカシについては、水さらしによるアク抜きのみ実施しているので、処理前と水さらし②におけるそれぞれの成分と熱量(kcal)を示した。

アク抜き処理前の100gあたりに占める各成分をコナラ、クヌギ、アラカシの順にみていく。

コナラはタンパク質4.1g、脂質2.9g、炭水化物77.8g、灰分2.1g、水分13.1g、クヌギはタンパク質3.3g、脂質3.3g、炭水化物74.3g、灰分1.6g、水分17.5g、アラカシはタンパク質3.4g、脂質2.5g、炭水化物75.5g、灰分2.1g、水分16.5gである。

次に水さらし②を経過し、アク抜きがほぼ完了したものについて同様に成分をみると、コナラはタンパク質2.4g、脂質2.2g、炭水化物76.6g、灰分0.5g、水分18.3g、クヌギはタンパク質3.1g、脂質3g、炭水化物73.1g、灰分0.5g、水分20.3g、アラカシはタンパク質2.1g、脂質2.3g、炭水化物76.9g、灰分0.4g、水分18.3gとなった。

それでは加熱処理したものをみてみよう。グツグツと煮て、短時間でアク抜きを完了したコナラはタンパク質2.3g、脂質4.1g、炭水化物80.3g、灰分0.4g、水分12.9g、クヌギはタンパク質4.3g、脂質5.2g、炭水化物78.2g、灰分0.5g、水分11.8gである。

熱量(kcal)についてもみしてみる。アク抜き処理前のコナラ、クヌギ、アラカシの100gの熱量(kcal)は、コナラ354kcal、クヌギ340kcal、アラカシ338kcalである。水さらしによるアク抜き完了時の熱量(kcal)は、コナラ336kcal、クヌギ332kcal、アラカシ337kcalである。加熱による結果は、コナラ367kcal、クヌギ377kcalとなった。

以上の結果から、水さらしにおいては、アク抜きの前と後でコナラ、クヌギ、アラカシともすべての栄養素および熱量(kcal)が微量ながら減少している。一方、コナラとクヌギで加熱処理後の栄養成分は、タンパク質、脂質、炭水化物の量がクヌギではすべて増加し、コナラでも脂質と炭水化物で増加している。そして熱量(kcal)についても加熱後にやや増加していることがわかった。水さらしでアク抜きすると、加熱によるものと比較して、栄養分の消失(流失)を招くようである。かつ熱量(kcal)についてもやや低くなる点は留意すべきことであろう。あるいは水さらしは加熱していない分、数値が低いのは当然とも言える。水さらしであろうが、加熱であろうが、アク抜き処理のできあがったドングリ粉は調理段階で熱が加わることになる。栄養成分も熱量(kcal)も高く保たれる加熱処理によるアク抜きは、調理する上で理にかなった処理方法と言えるであろう。

しかし、ここでも問題がある。ドングリデンプンを含め、一般にデンプンは加熱によりベータ(β)デンプンを人間の体内で消化吸収できるアルファ(α)デンプンに変化させる。加熱せず生のままのドングリを食べても栄養として吸収されない。さらに、加熱してせっかくアルファ(α)デンプンに変化しても、食べずにそのままにしておくといわゆるデンプンの老化が始まり、もとのベータ(β)デンプンに近い状態にもどってしまう。デンプンの老化は、栄養成分や熱量(kcal)に大きな変化はないものの、著しい風味の低下を招く。長期の保存は不可能と考える。

したがって、加熱処理してアク抜きされたドングリは、2～3日で食べきれぬ分量とし、早めに食べ切るほうがよい。また、加熱処理したものを乾燥させて水でもどしたドングリ粉は、再度水とともに加熱しても葛餅のように固まらず、他の食材に混ぜ込むつなぎ粉としては使えない。この場合、他の料理に足す「嵩増し」として有効な食材となろう。

4. 低湿地貯蔵穴の用途

ドングリが結実・落果する季節から、採集・アク抜き・調理し、年間を通じて食するためには、できるだけ多くのドングリを採集するとともに、それらを貯蔵するための方策を練る必要がある。

貯蔵という観点から一般的にいわれている遺構として、乾燥型および低湿地型の貯蔵穴がある。

乾燥型貯蔵穴については、水漬け効果のある低湿地型と比較して、長期保存に耐えられない。乾燥型貯蔵穴を考慮して畑地に掘った土坑内で、3か月経たないうちにほとんどのドングリが腐敗したという岩永哲夫氏の報告(注9)もある。虫や動物による被害もあり、屋内ではまだしも屋外での

保存は厳しい。

低湿地型貯蔵穴についてはどうであろうか。バケツに野外で水漬けしておいた場合、秋から冬の間は水を7日毎に換えながらなんとか腐らさずに過ごすことはできる。しかし、春先から次第に水がぬるむ頃になると、いくら水を頻繁に交換しても表面にヌメリが生じ、腐敗あるいは発酵したような臭いが発生してくる。とても水につけたまま春を越すことはできない。低湿地型貯蔵穴についてもあまりに長期の貯蔵は無理であろう。

以上の点を念頭に、水さらしにより虫殺しなどを行うなかで、水と関連する低湿地貯蔵穴のアク抜きの有効性を確認しようと試みた。バケツの中で水を換えながらの水さらし(水漬け)で各種ドングリのアクはどのように変化するのか。ここでもタンニン量を計測した(付表1下)。その結果、意外なことが判明した。

ポリバケツ(13ℓ)を6つ用意し、それらに殻のままと殻を除去したコナラ、クヌギ、アラカシを2/3ほどの量を入れて水で満たし、水を1日1回換えながら、3か月後のアク抜け状況を100g中のタンニン量計測により調査した。

3か月後のタンニン量と、水漬け前のタンニン量(括弧付き)を合わせて示すと、殻付ではコナラ5.14g(5.98g)、クヌギ4.8g(4.62g)、アラカシ7.76g(5.59g)となった。そして殻なしではコナラ3.98g、クヌギ4.56g、アラカシ6.01gという結果である。コナラはわずかにタンニン量が減少したものの、クヌギとアラカシはいずれも水漬け前と比較してタンニン量は増加する結果となった。溜まった水のなかで濃度が濃くなったアクがドングリの果実内に蓄積したのであろうか。

コナラについては、タンニン量がわずかながらも減少し、クヌギでは殻のままではタンニン量が増加しているが、殻を除去したものではごくわずかながら減少している。したがって、アク抜きの効果がまったくないとは言えないであろう。

	コナラ		
	果実(処理前)	水さらし② アク抜き後	加熱アク抜き後
たんぱく質	4.1	2.4	2.3
脂質	2.9	2.2	4.1
炭水化物	77.8	76.6	80.3
灰分	2.1	0.5	0.4
水分	13.1	18.3	12.9
エネルギー	354	336	367

	アラカシ	
	果実(処理前)	水さらし② アク抜き後
たんぱく質	3.4	2.1
脂質	2.5	2.3
炭水化物	75.5	76.9
灰分	2.1	0.4
水分	16.5	18.3
エネルギー	338	337

	クヌギ		
	果実(処理前)	水さらし② アク抜き後	加熱アク抜き後
たんぱく質	3.3	3.1	4.3
脂質	3.3	3	5.2
炭水化物	74.3	73.1	78.2
灰分	1.6	0.5	0.5
水分	17.5	20.3	11.8
エネルギー	340	332	377

- ※1 窒素・タンパク質換算係数：5.30
 - ※2 計算式：100 - (水分+タンパク質+脂質+灰分)
 - ※3 栄養表示基準(平成15年厚生労働省告示第176号)によるエネルギー換算係数：タンパク質4、脂質9、炭水化物4
- (成分の単位はg/100g、エネルギーの単位はkcal/100g)

付表2 ドングリ別アク抜き処理後の栄養成分とエネルギー熱量

実際の屋外に設けられた貯蔵穴は、掘削された場所における酸性・アルカリ性土壌の違い、バクテリアや昆虫・動物などによる影響もあり、ポリバケツ内での水漬けとは比較にならないほど多くの自然要因が作用するといえる。土壌や自然水に含まれる鉄分などがドングリのタンニンの酸化に影響を与えることもあろう。

したがって、今回の実験結果のみから低湿地型貯蔵穴のアク抜き効果については明言できない。ただ、バケツ内の水は容易に換えることはできるが、野外の貯蔵穴では仮に流水・湧水のごく近くに掘られたものでも、染み出た濃褐色のアク水に漬かったままの状態になることは多いのではなかろうか。よほど豊富な湧水・流水が速やかに貯蔵穴内を循環かつ入れ換わる場所に土坑を設けるか、人為的に頻繁な水換えを行わない限り、貯蔵穴内でのアク抜きの効果はあまり期待できないと考える。

低湿地型貯蔵穴および乾燥型貯蔵穴の機能を検討する場合は、ドングリの種類によりアク抜きや虫殺し、発芽阻止、短期間の一時保存などを柔軟に考える必要がある。

5. ドングリを粉にすること

今回のアク抜き実験では、石臼を使用して粒から粉にして、それらのデンプンを流出させないようにして水さらしや加熱を行ってきた。アクのあるドングリはいずれも殻付や殻を割った果実のままでは、長期間水に漬けても食べられるレベル(1g以下/100g)にまでアクを抜くことは非常に難しい。したがって、ドングリはアク抜き作業の過程で、細かく潰していくことになる。ピーナッツやアーモンドのように粒のまま食することは、ドングリについては考えられない。ドングリは粉にしなければならないし、粉にするということの意味を深く考える必要がある。

石臼によりできた粉について一定の基準を設けるため、1インチに60メッシュ(2.54cm四方に60本)の篩目を通して得られたものを便宜的に「粉」とした。これより粗いものは「粒」状のものとした。このようないわゆる「粉」にするためには、ドングリが生っぽくてはだめで、ほぼカチカチに乾燥していなければならない。そして、粉にするための道具として石皿と磨石は絶対に必要である。ドングリの殻を割るためや、粗く砕くに当たって石皿は必要ではない。滑らかな磨面を損ねるような作業を石皿でおこなってはならない。ドングリの粗割りのための道具としては、木または石製の臼や棒状の杵が適している。

今回の実験では粉にするのに石臼を用いたが、磨石と石皿を用いて、今回の石臼と同様の細かさの粉を得ることができるのだろうか。

岩宿(旧石器)時代には台石のみで、明瞭な石皿の出土は^(註10)ない。石皿は縄文時代に出現・増加してくる。しかし、滑らかな磨面により明瞭な皿状の凹みを有する文字通りの石皿は、草創期、早期段階ではまだ少なく、おおむね前期前半から増加してくるとされる。^(註11)明瞭な凹みや磨面をもつ石皿と磨石がセットになってはじめてドングリを粉にすることができる。粉にするための磨石の使い方および石皿の形状はどうあるべきか、この点についても今後、使用実験を中心に取り組む必要性を感じている。

6. まとめ

以前、3種のドングリを取り上げて水さらしと加熱でアク抜き作業に取り組んだ。

そして今回、前回とまったく同じアク抜き作業を再現し、各工程の段階ごとに試料を採り、アク(タンニン量)、栄養成分、熱量(kcal)を具体的な数値で示した。これらの結果を箇条書きにしてまとめる。

- ・3種のドングリとも水さらしによりアクは確実に減少していくことを確認した。また、加熱による方法では、水さらしよりもさらに大きくアクは減少した。加熱は水さらしよりも格段に早くアクを抜くことができる。
- ・3種のうち、コナラがもっともアクが抜けやすく、次にクヌギ、そしてアラカシの順となった。照葉樹林のカシ類であるアラカシは、落葉広葉樹林のコナラなどのナラ類と比較してアクは少ないのではと考えていたが、まったく逆の結果となった。アラカシのアクの量はコナラ、クヌギとの差はほとんどなく、そのアクは非常に抜けにくいのである。
- ・水さらしも加熱も、アク抜き完了時におけるドングリの栄養成分、熱量(kcal)において、ほとんど差はなかった。水さらしによるほうが、わずかながらタンパク質、脂質、炭水化物などの栄養成分が加熱によるものより低い値となった。さらに熱量(kcal)も水さらしによるものの方が低い結果となった。加熱していないので数値が低いのは当然とも言える。
- ・低湿地貯蔵穴を想定したポリバケツによるアク抜きの効用は、3種のドングリともほとんど効果はなかった。ポリバケツのなかにドングリを水漬けし、水を取り換えながら3か月間置き、タンニン量を計測した。結果は、コナラでやや減少したものの、クヌギ、アラカシでは水漬け前よりもタンニン量の値が高くなった。水を換えてはいても、速やかに外へアクが排出されなければ、濃縮されたようにタンニンの酸化が進んでいくようである。

以上のように、ドングリ3種のアクが抜けていく過程を、具体的な数値で示すことができた。

今回の大きなテーマであるドングリの通年利用という問題を考える上から、縄文時代人がアク抜きをどのように行ったかは重要なポイントで、ささやかながらその一端は明らかにできた。今後の課題として、ドングリを粉にするための方法およびその意義を石皿、磨石、敲石などの石器から迫ることである。さらにドングリの保存についての方策をさぐり、ドングリ食の復元を通じて縄文人の知恵・技術を少しでも理解しようと考えている。

(ますだ・たかひこ = 当調査研究センター調査第2課調査第2係主任調査員)

(くろつば・かずき = 当調査研究センター調査第2課調査第1係専門調査員)

注1 増田孝彦・黒坪一樹「ドングリのアク抜き方法に関する一考察(縄文時代のドングリ食復元への試み1)」(『京都府埋蔵文化財論集』第6集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

注2 ドングリのアク抜きの民俗事例は豊富であるが、代表的なものとして以下の文献がある。

松山利夫「第八章 木の実のアク抜き技術」(『木の実』法政大学出版局 324～346頁) 1982

松山利夫「野生堅果類、とくにトチノミとドングリ類のアク抜き技術とその分布」(『国立民族学博

- 物館研究報告』2巻3号所収 528～539頁 国立民族学博物館) 1977
- 渡辺誠「第2章 野生堅果類のアク抜きに関する民俗資料」(『縄文時代の植物食』雄山閣考古学選書13 61～111頁 雄山閣) 1975
- 辻稜三「近畿地方における堅果類の加工に関する研究」(『季刊人類学』16-4 60～106頁 講談社) 1987
- 辻稜三「わが国の山村における堅果類加工に関する文化地理学的研究」(『立命館文学』510号所収 143～194頁) 1989
- 辻稜三「わが国における堅果類食の分布に関する基礎的研究」(『立命館文学』535号所収 69～105頁) 1994
- 佐々木高明「(2) 縄文時代の植物食」(『縄文文化と日本人』講談社学術文庫 86～92頁 講談社) 2001
- 注3 試料100gあたりのタンニン量・栄養成分・熱量(kcal)の計測を、財団法人日本食品分析センターに委託した。
- 注4 注2の松山1982 63頁でクヌギの100g当たりのタンニン量は1.3gと報告されている。しかし、クヌギは味覚的にもコナラ、アラカシ同様強い苦味・エグ味があり、今回の4.62gは妥当と考えられる。アクを抜くことなしにクヌギの生食はまず不可能である。
- 注5 注2松山1982 328頁
- 注6 注2渡辺1975 53頁
- 注7 先の小論(注1)での味覚実験では、アラカシのアクが最も抜けやすかった。苦味・エグ味の強弱とタンニン量の増減が単純に比例しないこともある。また、落下後から加工までの時間経過やタンニンの酸化度合いなどの条件によりアクが抜けにくくなることも考えられる。
- 注8 粕川照男「2食品の腐敗と変敗 デンプンの老化」(『食品保存の知恵』27～29頁 研成社) 1985
- 注9 岩永哲夫『考古学者のドングリ交遊記 縄文の主食を求めて』みやざき文庫82 198頁 鈿脈社 2011
- 注10 黒坪一樹「植物食利用具としての敲石」(『特集 旧石器時代の敲石』考古学ジャーナル556 8～9頁 ニューサイエンス社) 2007
- 注11 安達厚三「石皿」(『縄文文化の研究7 道具と技術』130～134頁 雄山閣) 1983
- 上條信彦「石皿と磨石」(『縄文時代の考古学5 なりわい-食料生産の技術-』88～91頁 同成社) 2007

ながおかきゅうあと みなみかきうち
1. 長岡宮跡第489次・南垣内遺跡

所在地 向日市寺戸町南垣内

調査期間 平成24年5月17日～6月30日

調査面積 80㎡

はじめに この調査は、府道上久世石見上里線地域自主戦略交付金(交安)事業に伴い、京都府建設交通部の依頼を受け実施したものである。

調査地は、長岡京条坊復元によれば長岡宮北辺官衙(北部)の西部に位置し、南側には一条条間南小路の宮内延長道路が推定されている。長岡京以外の遺跡としては、西側に白鳳期創建とされる宝菩提院廃寺、東側には物集女街道沿いに発展した中世集落南垣内遺跡(鎌倉～江戸時代)が広がっている。また、周辺には「古城」、「御城ノ内」という小字名が存在することから、50m四方の寺戸城(竹田氏の居館で、14世紀前半頃)が推定されている。

調査概要 今回の調査地は段丘低位面の谷部に位置し、堆積土上を整地した面より遺構を検出した。土砂の堆積は南西・西方向から認められ、谷筋であることがうかがわれる。

上層遺構としては、谷筋に沿って溝2条を検出した。西隣で検出された近世流路の延長部分と考えられる。方向的には「はり湖池」の下受けとなるため池からの水路で、江戸時代末期の地籍図に記載されている水路の可能性もある。

下層遺構としては、13世紀後半～14世紀の遺物が出土した溝を検出した。北西方向から南東方向に流れており、谷底を流れる流路である可能性がある。方向的には東側の長岡宮第473次調査で検出されているS D07に延びていく。

また、寺戸城に関係する遺構は検出されなかったが、同時期の集落である南垣内遺跡に関する遺物が出土している。古墳時代・長岡京期の遺構は検出されなかったが、同時期の遺物は出土している。南側の高位側に遺構が存在すると想定されることから、整地等により遺物が混入したものと考えられる。

(増田孝彦)



調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

にしむら 2.西村遺跡第2・3次

所在地 京田辺市大住堂附

調査期間 第2次：平成23年12月8日～平成24年2月2日

第3次：平成24年5月1日～5月30日

調査面積 375㎡(第2次)、195㎡(第3次)

はじめに 西村遺跡は、木津川左岸に広がる河岸段丘の西端部に位置し、西側には甘南備山と鳩ヶ峰を繋ぐ丘陵地帯が延びる。遺物の散布地として周知され、調査前は水田であった。今回は、新名神高速道路整備事業に伴い、当該遺跡範囲内に設置される橋脚部分の発掘調査を行った。

調査概要 今回の調査対象は橋脚建設予定地3か所で、第2次調査では西側の予定地(2-1tr)と東側の予定地(2-2tr)を、第3次調査では中央やや西よりの予定地(3-1tr)をそれぞれ調査した。2-1trでは、地表面下約0.9mの暗オリーブ灰色粘質土と明青灰色粘質土の混合層上面で中世の鋤溝群と幅約7.0m、深さ約0.8mを測る自然流路跡を検出した。また、流路跡の南岸からは、竹と思われる細い木材を2列に配し、両側を杭で固定した護岸設備と考えられる遺構を検出した。遺物は鋤溝群から土師器片と瓦器片が、流路跡からは用途不明木製品と銭貨「元祐通宝」(1086年初鑄)1点が出土している。2-2trでは、地表面下約0.9mのオリーブ黒色粘質土層上面で牛のものと思われる偶蹄類の足跡を検出したが、明確な遺構は検出されなかった。3-1trでは、地表面下約0.8mの青灰色粘砂質土層上面で幅約0.1～0.2m、深さ約0.1mを測る溝状遺構17条を検出し、遺構および包含層より中世後期から近世初頭にかけての土師器皿、瓦器片、瓦片、青磁片、中国製磁器片などが少量ながら出土した。また、地表面下約0.9mの灰白色粘質土層上面では畑痕跡と考えられる薄い粘土溜まりを検出し、瓦器片と銭貨「皇宋通宝」(1039年初鑄)1点が出土した。



調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 淀)

面では畑痕跡と考えられる薄い粘土溜まりを検出し、瓦器片と銭貨「皇宋通宝」(1039年初鑄)1点が出土した。

まとめ 今回の調査では、これまでの調査では確認されていなかった中世から近世にかけての畑の痕跡を検出した。このことから、この地域では中世段階から耕作が行われていたと考えられ、周辺には活動の拠点となった集落遺跡の存在がうかがわれる。

また、東側では地山面が検出されなかったことから、河川の旧流路か谷状の旧地形であったことが想定される。

(大高義寛)

むかいだに 3. 向谷遺跡第 4 次

所在地 京田辺市大住堂附・松井叶堂

調査期間 平成24年5月1日～6月14日

調査面積 725㎡

はじめに 向谷遺跡は木津川によって形成された河岸丘陵に位置する。土師器片が採取される散布地として周知されている。調査前は水田であった。今回は、新名神高速道路整備事業に伴い当該遺跡範囲内に設置される橋脚部分の発掘調査を行った。なお、向谷遺跡については、昨年度にも同事業に伴い発掘調査を実施しており(第3次調査)、合計6か所の橋脚部分の調査を行っている(1～6トレンチ)。

調査概要 今回調査の対象となったのは3つの橋脚建設予定地点である。西側地点(7トレンチ)と虚空蔵谷川をはさんで、東側地点(8トレンチ・9トレンチ)を調査した。調査トレンチの番号は昨年度の調査に引き続くこととした。

7トレンチでは、地表面下約2.5mまで砂礫層を確認し、近世の溝6条を検出した。遺物は溝から鉄滓と陶磁器小片が出土した。最終的には地表面下約4.5mまで掘削を行って堆積状況等を確認したが、地山面は確認できなかった。

8トレンチでは、現水田面下約2.5mまで砂礫層を確認した。この砂礫層は河川等の堆積に伴うものと思われ、遺構は検出されなかった。遺物は土師器片、瓦器片が少量出土した。

9トレンチでは、現水田面下0.2～1.4mほどで、水田造成前の地形を確認することができた。すぐ西側の丘陵上には松井横穴群や向山遺跡などがあり、関連する遺物の出土が期待されたが、出土遺物は土師器片や須恵器片、瓦片などが少量あるにすぎない。

まとめ 今回の調査では、以前から周知されていたように土師器片などの遺物が出土したものの、顕著な遺構は確認できなかった。7トレンチあたりは、虚空蔵谷川による堆積や旧河川流路などであったことが想定される。また、8・9トレンチでは河川堆積等を確認し、少量ではあるが遺物が出土した。しかし、これらの出土遺物から調査地周辺に集落等の遺跡が存在した可能性が高い。

(山崎美輪・筒井崇史)



調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 淀)

ながおきょうあとうきょう
4.長岡京跡右京第1046次

所在地 長岡京市調子2丁目

調査期間 平成24年7月19日～8月30日

調査面積 200㎡

はじめに この調査は、平成24年度一般国道478号京都縦貫自動車道京都第二外環状道路建設事業に伴い実施したものである。調査地は、長岡京跡の条坊復原では長岡京右京九条三坊八町(新条坊では八条大路)にあたる。調査地は、右京第968次調査地と西側の用地界付近に挟まれた調査空白部分が対象となった。調査地北西側は民家への進入路、南西側には農業用水路が通じており、調査トレンチは3分割して設定することとなった。

調査概要 1 トレンチでは平安時代前期～中期を中心とした遺物が出土した流路S D01(上層)・02(下層)を検出した。右京第968次調査c 3-1・c 3-2地区を通じている流路S D36に相当すると考えられる。

2 トレンチでは流路の南肩部のみ検出した。東側のc 3-1地区西壁沿いで検出した流路S D36の一段深くなった部分に通じているようである。遺物は出土しなかった。

3 トレンチはc 3-2地区の流路S D36延長部およびc 3-3地区の流路S D50の延長部に設定した。検出した遺構は、柱穴14基、古墳時代後期～平安時代中期の遺物が出土した流路2条である。南端で検出した流路S D03はc 3-2地区の流路S D36の西側に屈曲した延長部であると考えられる。

まとめ 長岡京跡右京第1046次調査では、平安時代前期～中期にかけての流路跡(S D01・



調査地位位置図

(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

02)・柱穴、近世と考えられる溝・柱穴を検出した。S D01・02は、長岡京跡右京第968次調査で確認された平安時代前期～中期にかけての流路S D36の延長部と考えられ、今回検出した1トレンチでS D01・02に分かれることが判明した。出土遺物も右京第968次調査で出土しているものと同様であるが、瓦類の出土はほとんど認められなかった。また、この流路を挟んで北西側では柱穴を検出しており、付近に小規模な建物が存在した可能性を示唆している。また、ミニチュアカマド・土馬等の出土から、周辺で都城祭祀が行われていた可能性もうかがえる。(増田孝彦)

でやしき 5. 出屋敷遺跡

所在地 木津川市加茂町大野地内
 調査期間 平成24年5月24日～6月20日（Ⅰ区）
 平成24年8月23日～9月14日（Ⅱ区）
 調査面積 290㎡

はじめに 出屋敷遺跡は木津川左岸の平野部に位置し、弥生時代から奈良時代の遺物が採集される散布地である。これまでに幾度か旧加茂町教育委員会が発掘調査を行っているが、いずれも小規模調査であり、遺構・遺物に恵まれなかったことから遺跡の性格について未だ不明な点が多い。

今回の調査は、京都府建設交通部が実施する平成24年度加茂駅前線（第2工区）地域自主戦略交付金事業に先立ち、京都府山城南土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は拡幅範囲の位置関係から東部と西部の2か所に分かれ、東部の府道北側をⅠ区、また西部の府道南側をⅡ区とした。

調査概要 Ⅰ区は全長約135m、幅約10m（最大）を測る。5か所のトレンチ（第1～5トレンチ）を設定した。このⅠ区には、宅地化による厚い盛土（約1.5m）が存在し、旧地表の標高は36.2m前後を測る。標高34.8m（第1トレンチ）～36m（第4トレンチ）で中世遺物を含む木津川由来の砂礫層を検出したが、トレンチ幅2mという制約から、この砂礫層の底面は確認することができなかった。Ⅰ区では遺構は検出されなかった。Ⅱ区は西端部を除き自然堤防とみられる微高地に位置する。Ⅱ区の全長は約120mを測る。この地区では5か所のトレンチ（第6～10トレンチ）を設けた。第6～9トレンチは茶色系の砂が厚く堆積し、砂と薄い土砂が交互に堆積する状況から、水際堆積を示したものと判断される。第8トレンチで近世と判断する直径1.4m、深さ0.2mの円形土坑を1基検出したが、その他の遺構は検出されなかった。Ⅱ区では遺構に伴うものではないが、7～13世紀の須恵器・土師器・布目瓦・瓦器が出土した。

まとめ 今回の調査では、古代から中世の遺物が出土したものの顕著な遺構は確認できなかった。

Ⅰ区検出の砂礫層は中世頃には木津川の河道であった可能性が高い。また、Ⅱ区では7世紀～13世紀の遺物が出土したことから、Ⅱ区の南側微高地に遺跡の中心部が存在する可能性が高まった。

（竹原一彦）



調査地位置図

（国土地理院 1/25,000 田辺）

音の考古学

－考古資料としてのびんざさら－

小池 寛

1. はじめに

現代社会は、さまざまな楽曲をはじめ、車両が通行する際のエンジン音や工事に伴う金属音など日常的に雑多な「音」が氾濫している。しかし、原始古代では、風や雷などの自然現象に起因する音以外を耳にすることがなく、縄文時代の土笛や太鼓、弥生時代の銅鐸や陶埴、そして、寺院で奏でられる荘厳な越天楽などに宗教性を感じたことは想像に難くない。

一般的に楽器は、絃鳴・気鳴・膜鳴・体鳴楽器に分類される。本稿で紹介する「びんざさら」は、木筒様の小さな木片の一方を紐で結束し、複数の小木片が一度に重なり合う際に生じる音で田楽などの音頭をとる体鳴楽器である。現在も民俗楽器として使用されており、用法については、田楽の復元的研究に伴い概ね想定されるに至っている。しかし、考古資料としての検討はほとんど行われていないのが現状である。本稿では、びんざさらを焦点をあて、今後の型式学的研究の基礎的資料を提示することを目的としている。

2. 田楽と「びんざさら」

第1図^(注1)は、鳥獣戯画に描かれた蛙が、びんざさらをもって田楽を舞う様である。12世紀中葉から13世紀中葉に制作された戯画には擬人化された動物たちの遊戯が活写されており、田楽舞いが広く民衆に浸透していたことを表している。田楽が、大陸起源であるか否かについては判然としないが、五穀豊穡を祈願する宗教的行事であったことがわかる。その成立時期についても農民本

位の農事行事であるため不明な点が多いが、少なくとも文献の記載記事から平安時代中期には盛大な行事として定着していることが明らかになっている。

文献では「編木」「拍板」を「びんざさら」と読んでおり、総長3尺5寸、取っ手の長さ5寸7分、葉の長さ2寸5分との法量記載がある。戯画及び民俗芸能などから葉の結束部を外側にして曲げた際に生じる音で音頭をとる。田楽舞いには、不可欠な楽器である。

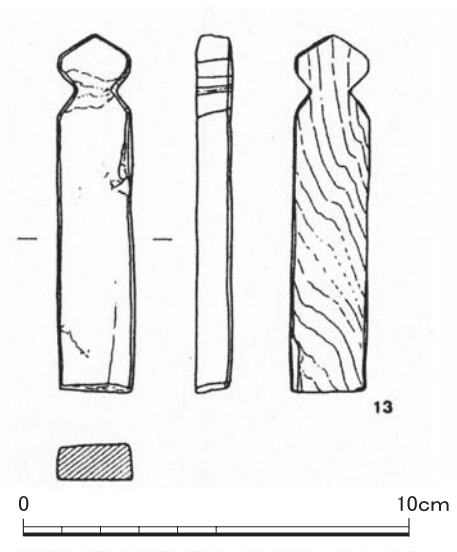


第1図 鳥獣戯画に描かれた蛙
(注1の一部をトレース)

3. 出土木製品と比定年代

第2図^(注3)の木製品は、京都府亀岡市千代川遺跡第15次調査32区から出土した。同区では、北方と東・西方から流

れ込む流路を検出するとともに桁行4間×梁行2間の総柱掘立柱建物跡をはじめ、桁行2間×梁行2間の掘立柱建物跡2棟を検出している。これらの掘立柱建物跡群の西方に隣接する包含層から第3図に示す9～10世紀の遺物とともに木製品が出土した。出土した木製品は、上端部を三角形状に削り出し、端部から1.7cmのところ木筒のように両方から切り込みを入れている。全長9.2cm、幅2cm、厚さ0.9cmを測る。報告文には「赤外線カメラを用いても文字は確認できなかったことや、厚いことから未使用」の木筒であることを想定している。形状的には、通有に見られる荷札木筒に酷似しているが、厚みが0.9cmを測るなど相違点もあり、木筒とは断定できなかったようである。千代川遺跡は、丹波国府の有力な推定地であり、それを傍証するかのように数多くの墨書土器や緑釉陶器、灰釉陶器、石帯などが出土している。

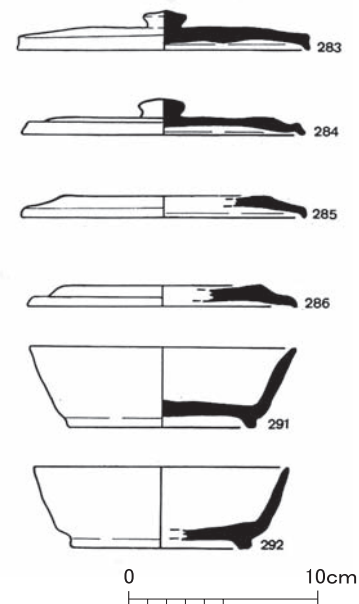


第2図 出土木製品実測図（注3転載）

4. 考古資料としての「びんざさら」

文献に記載されたびんざさらの一枚の葉の全長は、先に述べたように2寸5分、概ね8.3cmである。一方、千代川遺跡の出土木製品は全長9.2cmである。少なからず法量において差異は認められるが、有職故実に準拠した楽器のように必ずしも統一的規格を前提とする必要はないことと、木筒とするには厚いことから出土木製品がびんざさらを構成する小木片の一葉である蓋然性は高いといえる。

古代の楽器のなかでの琴の研究は、比較的出土事例も多く、型式学的研究が進展している状況である。また、弥生時代の陶埴や横笛などは、東アジアのなかでの歴史的な位置付けがなされている。しかし、本稿の主題であるびんざさらは、そのもの自体の認識が木製品研究のなかで未だに浸透していないのが現状である。今後、丹念に出土事例を探索することにより古代の「音」研究は、着実に進展するものと確信している。（こいけ・ひろし＝当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長）



第3図 千代川遺跡共伴土器（注3転載）

注1 澁澤敬三編集「49びんざさら」（『新版絵巻物による日本常民生活絵引 第一巻』株式会社平凡社）1984

注2 注1文献「62田楽」78頁、「49びんざさら」65頁に詳細な記述があり、それに拠った。

注3 森下衛、鶴島三壽ほか「千代川遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』第16冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1992

桂川右岸地域における古墳時代集落の動向（４）

古川 匠

9. 松尾・桂地区の様相（第6図）

松室遺跡では、前期の集落は竪穴建物から構成される。しばらく中断するが、後期中頃になると掘立柱建物を主体とする集落が新たに形成される。後期の集落内には大規模な流路が検出され、桂川からの取水を目的とした人工水路と考えられている。また、松室遺跡は、桂川右岸では突出して早い段階に掘立柱建物から構成される集落形態に移行しており、当地域では異様な印象さえ受ける集落である。対岸の嵯峨野一帯の勢力との関係も視野に入れる必要があるかもしれない。

革嶋館下層遺跡では、近年の調査で、寺戸川に隣接する地点で前期初頭の竪穴建物数棟が検出されている。限定的な範囲の調査ではあるが、竪穴建物の分布密度は高い。桂川右岸北部では、古墳時代の最初期の集落と考えられる。

下津林遺跡は古くから弥生～古墳時代の遺物散布地として知られているが、調査件数が少なく、様相は不明である。

榎原遺跡では前期の竪穴建物、溝が検出されている。また、中期の落ち込みが検出され、多量の遺物が出土した。調査事例が少なく、また、後世の削平が著しいため古墳時代の状況については断片的なことしか判明していないが、長期間にわたって存続した集落のようである。榎原遺跡は古代寺院・榎原廃寺と隣接しており、寺院造営の主体となる集団の居住地だった可能性がある。

当地域は向日市域に匹敵する密度で首長墳が分布するが、集落の様相は不明な点が多い。

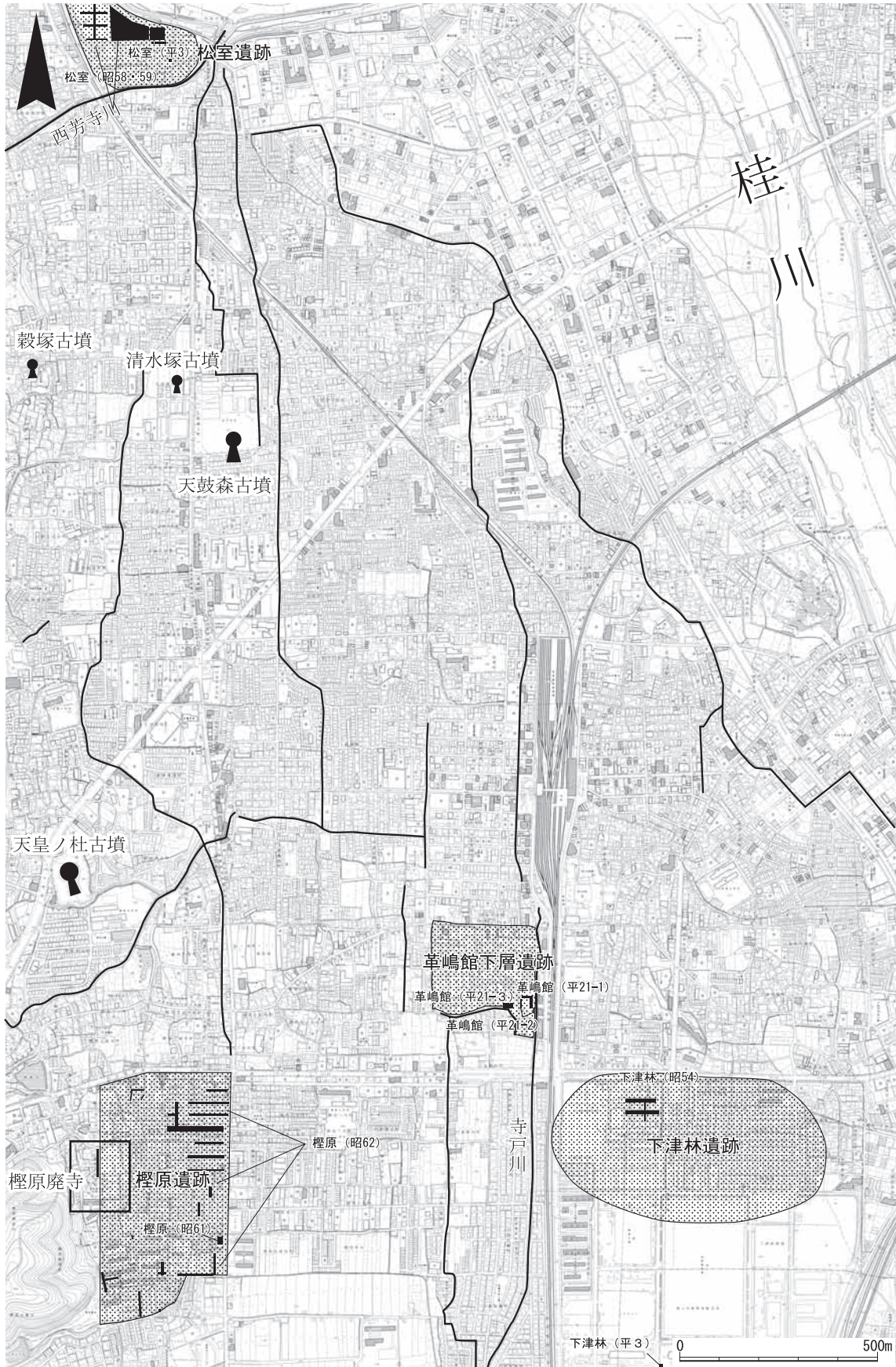
10. 久世・久我地区の様相（第7図）

上久世遺跡では前期初頭から前期前葉の大溝が集落内を流れ、同時期の竪穴建物、掘立柱建物が検出されている。中期の遺構は確認されていないが、後期の竪穴建物が数棟検出されている。当遺跡は弥生時代後期末から継続する集落のようである。

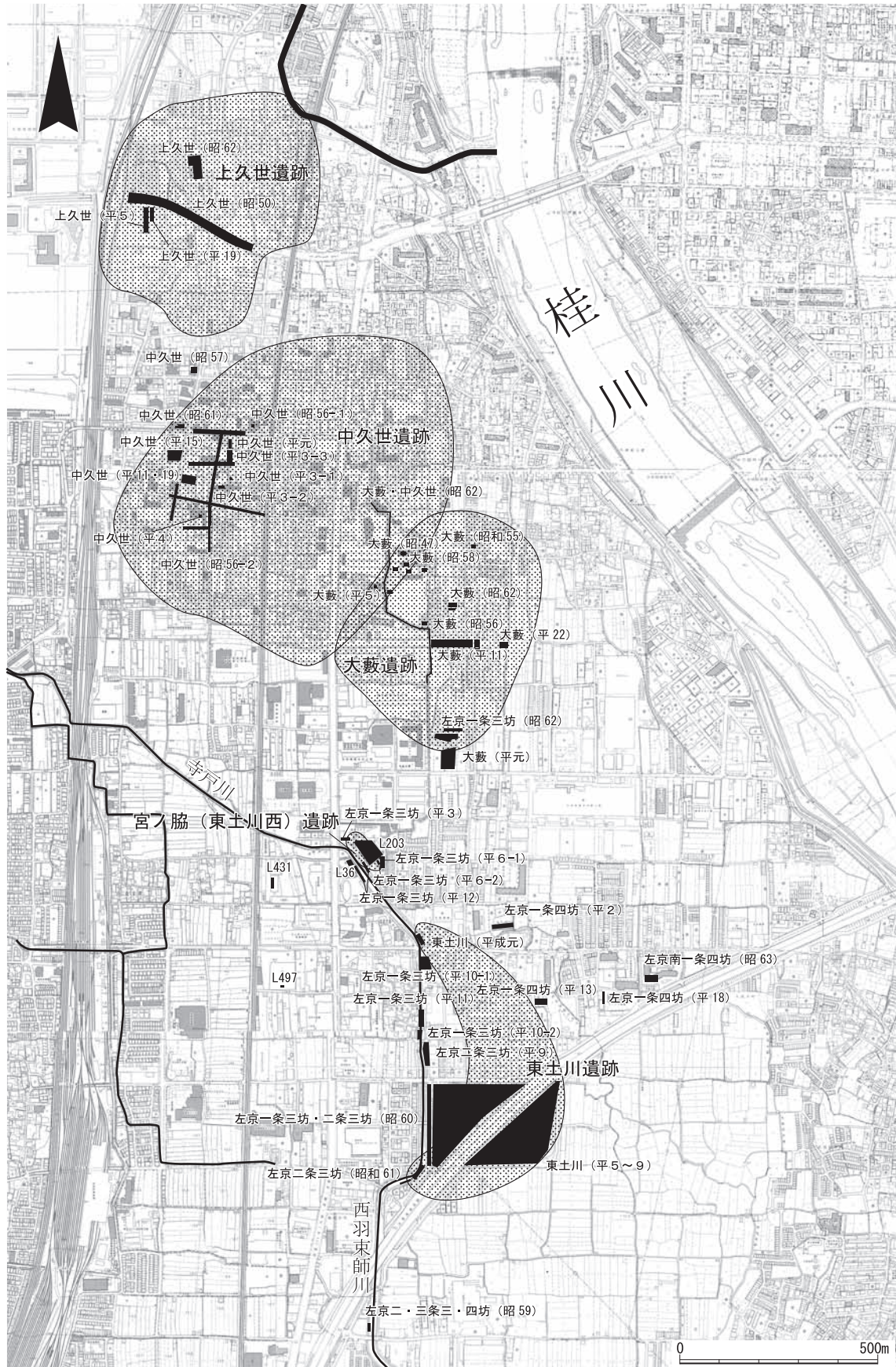
中久世遺跡は、前期初頭から後期末までの遺構・遺物が確認されており、前後の弥生時代後期・飛鳥時代を含め、長期間にわたって存続した集落のようである。

大藪遺跡は、弥生時代後期の大型掘立柱建物の存在が注目を集めた集落遺跡であるが、古墳時代まで集落が存続するようで、前期初頭から中期にかけての遺構が検出されている。

なお、中久世・大藪遺跡の居住域は、中久世遺跡では周知遺跡範囲の西部に、大藪遺跡では周知遺跡範囲の南部にそれぞれ位置する。当時のこの一帯は複数の小河川が桂川に向かって流れこむ湿地帯で、その中に点々と存在する微高地上に居住域を営んだようである。



第6図 松尾・桂地区 古墳時代集落分布図(S=1/15,000)
 (都市計画地図「松尾」「上桂」「山田」「桂」)



第7図 久世・久我地区 古墳時代集落分布図(S=1/15,000)
(都市計画地図「寺戸」「久世」「向日町」「久我」)

宮ノ脇(東土川西)遺跡は、古墳時代前期の居住を示す遺構が少数検出されているが、調査で検出されている遺構の大部分は流路である。流路からは、特に庄内式期から布留式期にかけての大量の遺物が出土しているが、初期須恵器を含む中期から終末期にかけての遺物も多く出土している。長期間にわたって河川交通がなされた場所なのであろう。

東土川遺跡は、宮ノ脇(東土川西)遺跡の南方に位置し、古くから知られる古墳時代の集落遺跡である。特に平成5～9年に実施された発掘調査では多数の流路が検出された。他地点の調査成果も踏まえると、上記の各遺跡と同様に流路沿いの微高地に居住域を営んでいたことが分かる。

この地域では、集落立地を生かした物流が盛んだったようで、特に中久世・宮ノ脇(東土川西)・東土川遺跡では、旧流路や溝から、庄内式期から布留式古段階にかけて、多様な地域の外来系土器が出土している。河川を介した列島各地との交流が活発に行われた事が推定できる。

11. 久我・羽束師地区（第8図）

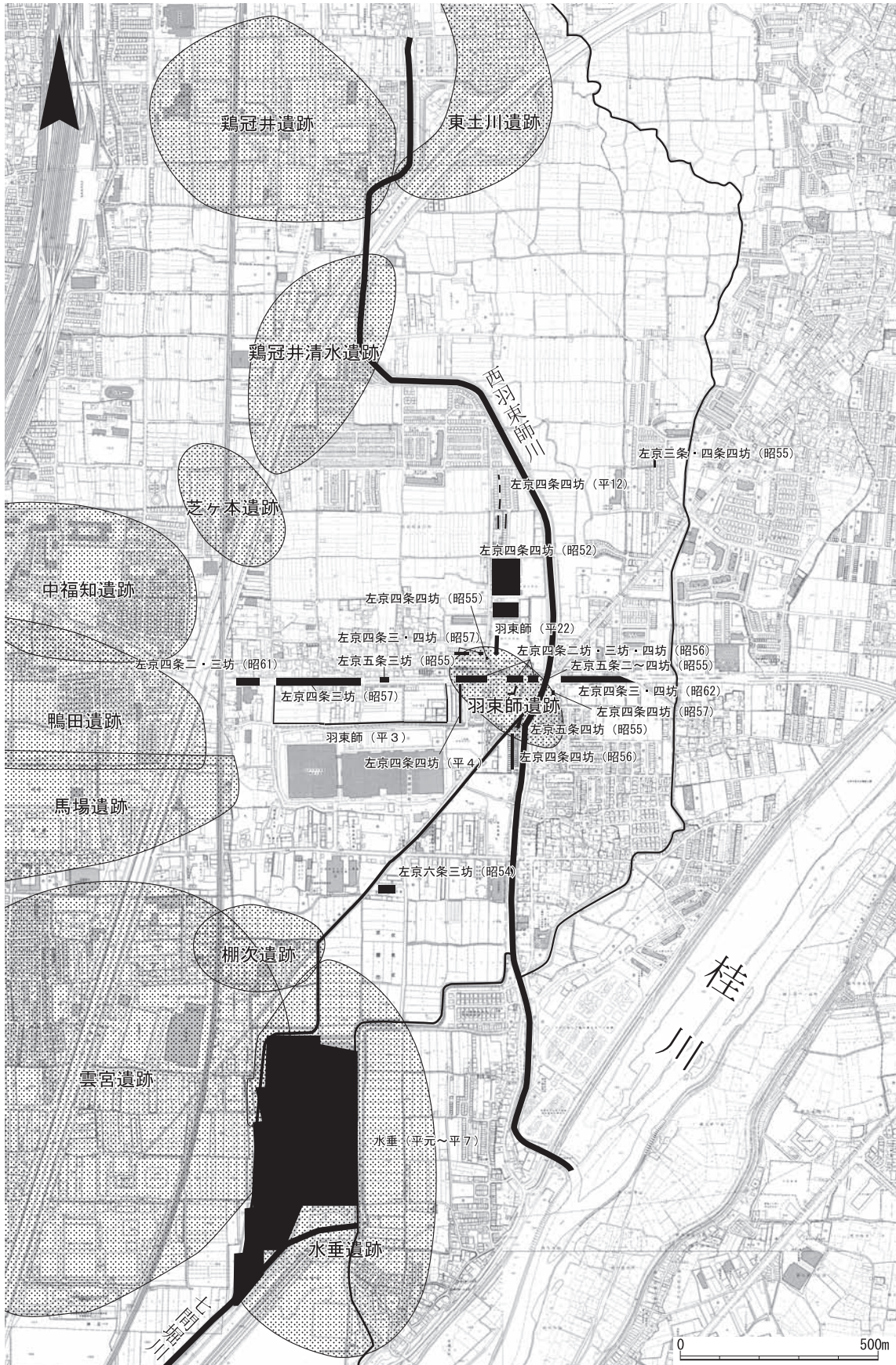
羽束師遺跡は、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて、周知遺跡範囲内に居住域が展開する。主な遺構として、竪穴建物、大溝、方形周溝墓が検出されている。中期の遺構は未検出であるが、後期中葉の遺構が少数検出されている。ただし、建物は前期のものしか確認されていない。周辺の湿地帯では、後期から奈良時代にかけての水田が営まれたようである。平成12年の調査では、湿地帯をまたいで北側にも居住域が存在することが確認されており、点在する微高地の上に居住域が複数存在したようである。

水垂遺跡は大型の拠点集落で、総数72棟の竪穴建物が検出されている。西に隣接する雲宮遺跡と一体の集落と考えられる。居住域の面積は80×100m以上と広く、また、外来系土器が大量に出土している。古墳時代の全期間を通して大量の遺物が出土しており、桂川右岸地域における、流通の一大結節点であろう。庄内期には、ベッド状遺構の付属する大型竪穴建物が存在し、有力者の居住が想定されるが、布留式期に入ると竪穴建物は小型化し、大型竪穴建物が消滅する。後期まで竪穴建物を主体とするが、終末期に入ると掘立柱建物のみから構成されるようになる。低地では洪水痕跡が確認されており、居住域の位置も環境変動に伴い移動している。

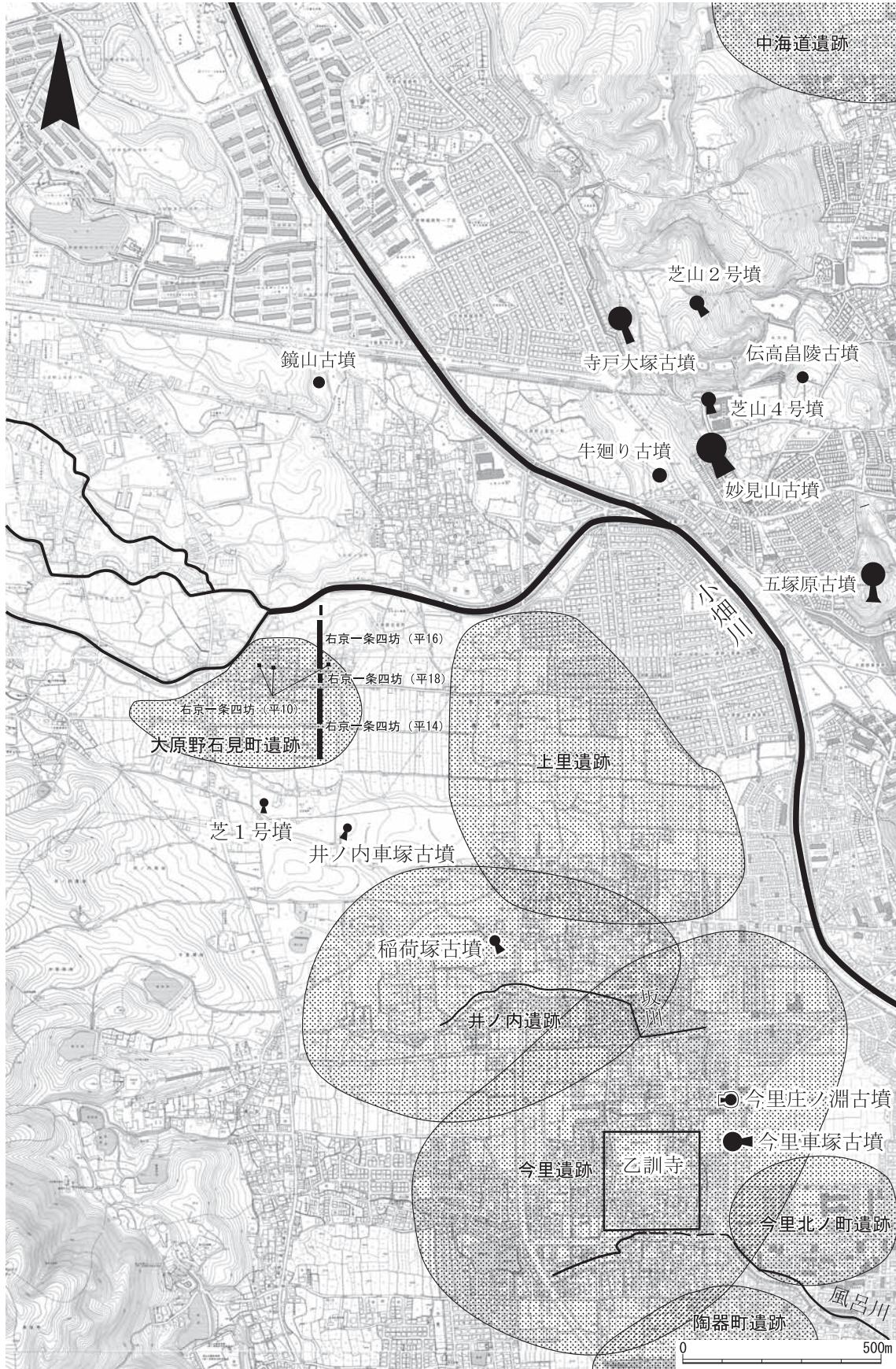
12. 石見地区（第9図）

大原野石見町遺跡は、近年になって古墳時代の集落遺跡であることが判明した。前期の竪穴建物が検出されており、庄内式期の遺物も出土している。遺物・遺構は少数で、小規模な集落と考えられる。中期に途絶え、後期中頃に再び居住が再開されるようである。東に隣接する上里遺跡は同時期の大規模集落であることから、大原野石見町遺跡の範囲も含め、一連の集落遺跡と考えられる。

（ふるかわ・たくみ＝調査第2課調査第2係調査員）



第8図 久我・羽束師地区 古墳時代集落分布図(S=1/15,000)
(都市計画地図「向日町」「久我」「長岡」「羽束師」)



第9図 石見地区 古墳時代集落分布図(S=1/15,000)
 (都市計画地図「石見」「寺戸」「粟生」「向日町」)

付表

第6図

松室遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
松室(昭58)	竪穴建物2(うち1棟が前期)、溝、掘り込み、落ち込み、ピット、包含層	土師器、須恵器(前期・後期)	竪穴建物、溝、ピット(弥生中)、溝、杭列(古代~中世)	京埋概 昭58
松室(昭59)	竪穴建物4、ピット(前期)、掘立柱建物4、溝、ピット、土坑(後期)	土師器(前期)、須恵器(後期)、鉄製農耕具(後期)	溝(弥生中)、掘立柱建物、溝(古代~中世)	京埋概 昭59
松室(平3)	柱穴列、土坑、溝(後期中)	6世紀前半から中頃の遺物		京埋概 平3

革嶋館下層遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
革嶋館(平21-1)	竪穴住居1(庄内~布留古)、溝、土坑、柱列	土師器(初頭~前期前葉)、須恵器、石製品	堀、井戸、集石遺構、柵(室町~江戸)	京埋研報 2009-6
革嶋館(平21-2)	竪穴建物2(庄内~布留古)、竪穴建物1(後期初頭)	土師器(初頭)、須恵器(TK47)、韓式系土器	堀(江戸)	京市分 平21 大坪 2012
革嶋館(平21-3)	掘立柱建物、土坑(初頭)	土師器、須恵器、土錘	堀、土塁、井戸、水路(中世~近世)	京市発 平21

下津林遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
下津林(昭54)	-	弥生土器	竪穴建物、土坑、溝(弥生後)	府埋概 1980-1
下津林(平3)	-	詳細不明	-	京市立 平3

樫原遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
樫原(昭61)	竪穴建物(前期)、溝(弥生後期~古墳前期)	土師器(前期)	溝(弥生)、溝、土坑(時期不明)	京市立 昭61
樫原(昭62)	落ち込み(中期)、包含層	土師器(中期)	瓦窯(奈良)、井戸、土坑(中世)	京埋概 昭62

第7図

上久世遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
上久世(昭50)	大溝(庄内~布留1)、竪穴建物3(うち1基は後期)	土師器、須恵器	竪穴建物2、土坑、溝(弥生中)	上久世(六勝寺)
上久世(昭62)	竪穴建物4、掘立柱建物1、井戸、流路(詳細不明)	土師器	竪穴建物、井戸(弥生)、掘立柱建物、土壙墓(平安)	京埋概 昭62
上久世(平5)	竪穴建物6(前期)	土師器(初頭~前期)、須恵器(後期)	竪穴建物、環濠(弥生中~後)	京埋概 平5
上久世(平19)	竪穴建物1(前期)、竪穴建物1(後期前)、ピット群(弥生後期末~初頭)	土師器、須恵器	-	京市立 平19

中久世遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
中久世(昭56-1)	土坑32(後期)、自然流路(中期~終末期)	詳細不明	-	京埋概 昭56(発掘調査編)
中久世(昭56-2)	流路(前期~中期)、土坑	土師器、石製品	竪穴建物、土坑(弥生後期)、土坑、溝(中世)	京埋概 昭56(試掘・立会調査編)
中久世(昭57)	土坑(後期末~初頭)	土師器	溝(弥生中期)	京市試・立 昭57

中久世（昭61）	流路跡（弥生中期～古墳時代前期前葉）	土師器（初頭～前期前葉）	落ち込み、自然流路（弥生中期～後期）	中久世遺跡概報昭61
中久世（平元）	竪穴建物3（初頭）	土師器（初頭）	土坑（弥生中期）、掘立柱建物、土坑（奈良）、溝（平安）	中久世遺跡概報平元
中久世（平3-1）	竪穴建物（中期前）	土師器（中期前）	ピット（弥生中）	京市立 平3
中久世（平3-2）	竪穴建物、土坑、柱穴（初頭・前期）、土坑、溝、柱穴（中期）、流路（弥生中期～古墳中期）	土師器（初頭～中期）、その他は不明	溝、土坑（弥生中）	京市立 平3
中久世（平3-3）	掘立柱建物（前期）	土師器（前期）	竪穴建物2（弥生後期）	京市試 平3
中久世（平4）	溝（弥生～古墳後期）	詳細不明	溝（古代）	京市試 平4
中久世（平11）	竪穴建物1、溝3、土坑、流路（前期）、掘立柱建物（後期末）	土師器（初頭）、須恵器（TK209）	方形周溝墓、土坑（弥生中期） 井戸、土坑、溝（平安）	京市発 平11
中久世（平15）	竪穴建物（後期）	-	-	京市試 平15
中久世（平19）	-	土師器、須恵器	土坑、溝（弥生）	京市試 平19
大藪・中久世（昭62）	流路	土師器、須恵器	流路	京埋概 昭62

大藪遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
大藪（昭47）	-	土師器（前期）、須恵器（中期）	護岸施設（奈良）	大藪遺跡報告（1972）
大藪（昭55）	-	土器類、木製品、有孔円板	自然流路、杭（弥生）、溝（長岡） 掘立柱建物、溝、井戸、土坑（鎌倉）	未報告
大藪（昭56）	流路	土師器、自然木	遺物包含層（長岡京）	京埋概 昭56（発掘調査編）
大藪（昭58）	流路（縄文～平安）	土師器、須恵器	-	京埋概 昭58
大藪（昭62）	-	須恵器（TK23～TK10）	竪穴建物（弥生後期）	大藪遺跡概報（昭62）
大藪（平元）	竪穴建物1（前期）、土壙墓5、溝（前期～中期）、溝、掘立柱建物、ピット群（中期）	詳細不明	竪穴建物4、方形周溝墓（弥生後期）、掘立柱建物（飛鳥）、総柱掘立柱建物（長岡京）	京埋概 平元
大藪（平5）	包含層	-	-	京市試 平5
大藪（平11）	-	土師器、須恵器	竪穴建物、柱穴（弥生後期）、土坑、掘立柱建物、井戸、堀、溝（鎌倉～室町）、掘立柱建物、井戸、土坑（中世末～近世初頭）	京埋概 平11
大藪（平22）	-	須恵器（後期）	掘立柱建物、門、柵、井戸、柱穴、堀、溝、土坑（中世末～近世初頭）	京埋報 2010-13
左京一条三坊（昭62）	竪穴建物（弥生後期末～古墳初頭）、竪穴建物7（初頭）	土師器（初頭～前期）	竪穴建物3（弥生後期）、掘立柱建物3（飛鳥）	京埋概 昭62

宮ノ脇（東土川西）遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
L36	流路（弥生後期～古墳）	土師器（初頭～前期）、須恵器（中期中葉・終末期）	流路（縄文～弥生）、掘立柱建物（長岡京）	長研報 2003
L203	流路（弥生後～古墳時代後） 流路（弥生中期～平安）	土師器、木製品、須恵器、石製品（初頭～後期）	竪穴建物2、溝（弥生後期）	京埋報 16 京埋概 昭63
L431	流路（前期～終末期）	土師器（前期）、木製品、須恵器	-	向日 61
L497	須恵器（図化されていないが、6世紀後半から7世紀初頭と記述される）	-	一条条間南小路北側溝、大型の井戸（長岡京期）	向日 77
左京一条三坊（平3）	流路	詳細不明	掘立柱建物（長岡京）	京埋概 平3
左京一条三坊（平6-1）	流路2（初頭～長岡京）、柱穴1（前期）	土師器（初頭～前期）、須恵器（TK216）、木製品、獣骨	-	京埋概 平6

左京一条三坊 (平6-2)	柱穴40、溝3、土坑3	土師器、須恵器	整地層(長岡京)	京埋概 平6
左京一条三坊 (平12)	竪穴建物2、柱穴(弥生末~古墳前期)	土師器(前期)、須恵器(後期)	竪穴建物、柱穴(弥生後期)、土墳墓、溝、柱穴(中世)、溝、柱穴、土坑(近世)	京埋概 平12

東土川遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
東土川(平元)	自然流路、しがらみ状遺構(堰の一部・後期前葉)	土師器、須恵器、木製品、建築部材	-	京埋概 平元
東土川(平5~9)	溝3(~中期)、流路1(~中期)流路2、溝4(~後期)、流路(~終末期)、溝、流路、土坑2(詳細不明)	土師器(前期~中期)、陶質土器(中期)、須恵器(後期)、玉類、石製品(前期~中期)	方形周溝墓、土坑、溝、水田(弥生)掘立柱建物、道路、溝(長岡京)	府七報 28
左京一条三坊 (平10-1)	土坑(前期)	土師器	土器棺墓(弥生中期) 井戸、掘立柱建物群(中世)	京埋概 平10
左京一条三坊 (平10-2)	土坑2(初頭、前期)	土師器(初頭~前期) 須恵器(後期)	道路側溝(長岡京)、土坑(平安) 溝(中世)、溝(近世)	京埋概 平10
左京一条三坊 (平11)	土坑(後期中)	土師器、須恵器(TK10)	道路側溝(長岡京)、井戸(近世・近代)	京埋概 平11
左京一条三坊・二 条三坊(昭60)	沼状遺構、溝	詳細不明	道路側溝、柵、掘立柱建物(長岡京)	京埋概 昭60
左京一条四坊 (平2)	流路(弥生~古代)	須恵器	掘立柱建物	京埋概 平2
左京一条四坊 (平13)	包含層	土師器、須恵器	湿地状堆積、土坑、包含層(弥生)	京市立 平13
左京一条四坊 (平18)	-	須恵器(後期)	流路(弥生前~中)	京埋年 平18
左京南一条四坊 (昭63)	水田	土師器、須恵器	水田(奈良)、掘立柱建物、柱穴、土坑(長岡京)、溝、火葬墓、土坑(室町)、建物跡、井戸、土器溜まり(桃山)	京埋概 昭63
左京二条三坊 (昭61)	溝(前期)、湿地(弥生~古墳後期)	土師器、須恵器	方形周溝墓(弥生中)	京埋概 昭61
左京二条三坊 (平9)	包含層	土師器、須恵器	流路(縄文)、溝(奈良)、掘立柱建物、柵、土坑(長岡京)	京埋概 平9
左京二・三条三・ 四坊(昭59)	自然流路	詳細不明	土坑(縄文)、溝(弥生)、道路側溝(長岡京)、溝(中世)	京埋概 昭59

第8図

羽束師遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
左京四条四坊 (昭52)	溝、杭、道路状遺構(後期)	須恵器(TK47~TK209) 土師器(TK43 共伴)	-	京埋研報 2
左京六条三坊 (昭54)	自然流路	土師器、須恵器	井戸、柱穴(長岡京)	京埋概 昭54
左京三条・四条四 坊(昭55)	溝5	土師器、須恵器	掘立柱建物、道路側溝、井戸、柵、土坑(長岡京)	京埋概 昭55
左京五条三坊 (昭55)	水田(終末期)	須恵器(終末期)	溝(弥生)、掘立柱建物、井戸(長岡京)	京埋概 昭55
左京五条四坊 (昭55)	竪穴建物2(初頭)	土師器	竪穴建物、多角形住居(弥生後期)	京埋概 昭55
左京五条二~四坊 (昭55)	竪穴建物、土坑(前期)、流路	土師器(前期)	流路(弥生後期~長岡京)、掘立柱建物、柵、井戸、土坑、溝(長岡京)	京埋概 昭55
左京四条二坊・三 坊・四坊(昭56)	竪穴建物(初頭)、流路、水田	土師器、須恵器、木器	竪穴建物2(弥生末)	京埋概 昭56 (発掘調査編)
左京四条四坊 (昭56)	溝	土師器、須恵器	溝(中世)	京埋概 昭56 (発掘調査編)

左京四条三坊 (昭57)	流路、落ち込み	土師器	水田（飛鳥～奈良）、流路、道路 側溝、掘立柱建物跡（長岡京）、 井戸、掘立柱建物、柵（平安・鎌倉）	京埋概 昭57
左京四条三・四坊 (昭57)	大溝、溝（前期）、溝（後期）	土師器、木製品	柱穴列、溝（長岡京）	京埋概 昭57
左京四条四坊 (昭57)	流路（弥生末～古墳）	土師器	-	京埋概 昭57
左京四条三・四坊 (昭62)	方形周溝墓（前期）	土師器	-	京埋概 昭62
左京四条四坊 (平4)	竪穴建物3（古墳時代の可能性）	詳細不明	柱穴、溝（長岡京期か）	京市試 平4
左京四条四坊 (平12)	竪穴建物3（詳細不明）	詳細不明	土坑、溝（時期不明）	京市試 平12
羽東師（平3）	水田、流路（古墳～奈良）	詳細不明	流路（平安）	京埋概 平3
羽東師（平22）	水田、畦畔、落ち込み（後期中～）	須恵器（TK10）	水田、畦畔（奈良）、掘立柱建物、溝、 土坑、整地層（長岡京）、溝、耕 作溝（平安）、耕作溝（鎌倉～室町）	京埋研報 2010 - 16

水垂遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
水垂(平元～平7)	竪穴建物17、掘立柱建物2（弥生後期末～古墳初頭）、竪穴建物7（初頭）、竪穴建物39、井戸2、水田、方形周溝墓、土器棺墓（前期後半～中期）、竪穴建物4、溝（後期前半）、竪穴建物6、掘立柱建物2（後期後半）、掘立柱建物11（終末期）	土師器（初頭～後期） 須恵器（TK73・216、ON46、TK47、MT15、TK10） 韓式系土器、木製品多量	河川、溝（縄文晩期～弥生前期）、 道路、道路側溝、掘立柱建物、柵、 溝、井戸、土坑、土器棺墓、流路（長岡京）	京埋研報17

第9図

大原野石見町遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
右京一条四坊 (平10)	土坑、包含層	土師器	包含層（弥生・中世）	京市立 平10
右京一条四坊 (平14)	流路（縄文～古墳前期）	土師器（前期）	道路側溝、溝、土坑、溝、柵、掘 立柱建物（長岡京）	京埋研概 2002 - 2
右京一条四坊 (平16)	溝（初頭）、竪穴建物1（前期）、 竪穴建物1（後期中葉）	土師器（初頭～前期）、須恵器 (TK10)	土坑（縄文）、掘立柱建物（長岡京） 掘立柱建物、門、柵、土坑、土塁 (中世)、建物、溝、カマド、トイレ、 土間（近世）	京埋研概 2004 - 15
右京一条四坊 (平18)	土坑4（前期）、土坑1（後期中葉）	土師器（布留2）、須恵器 (TK10)	建物、柵（長岡京）、柱穴群、土坑（中 世）、建物、井戸、土坑、溝（近世）	京埋研報 2006 - 22

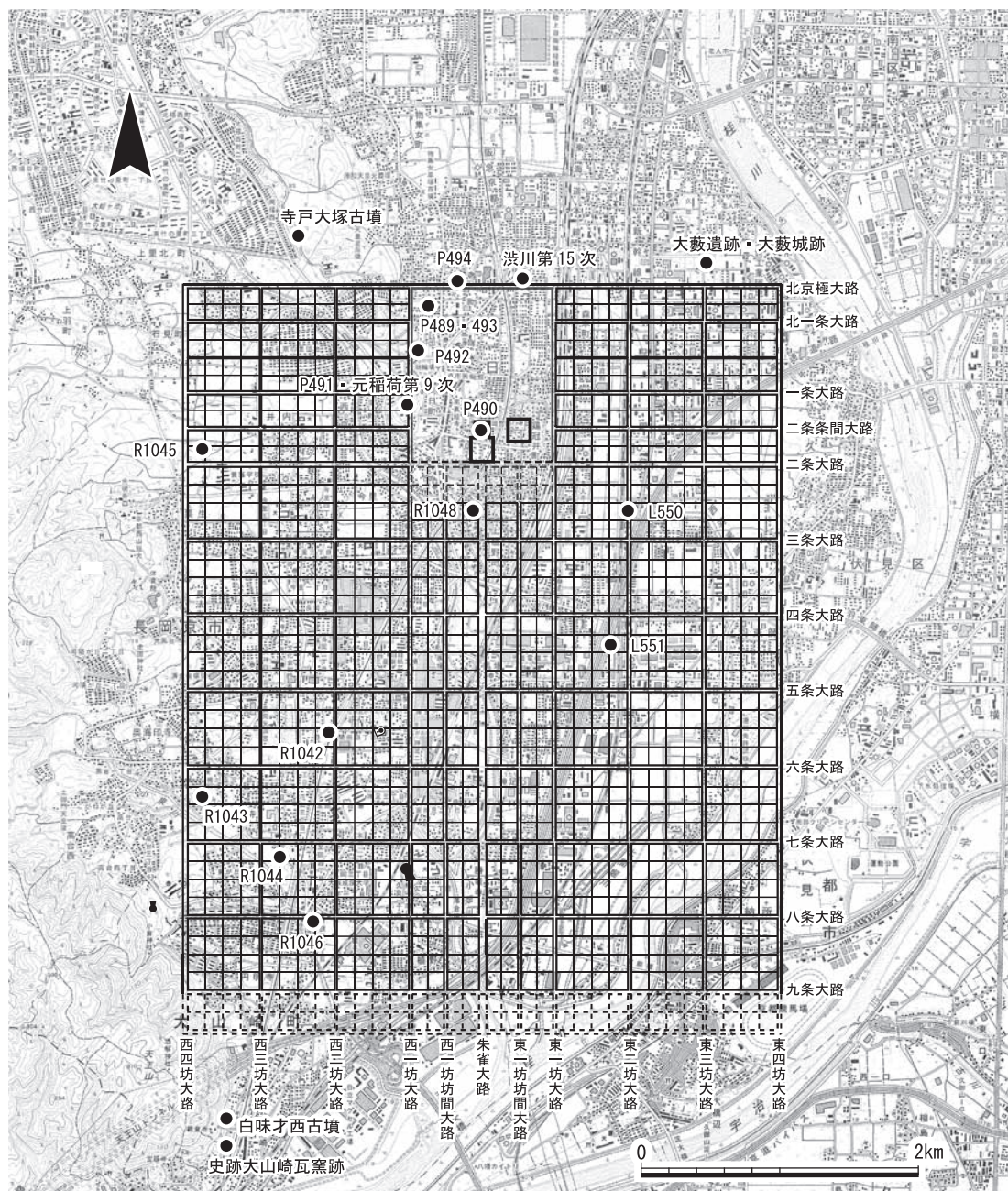
※遺構の時期区分については、弥生時代後期末を（庄内2・3期）、古墳時代初頭を（庄内4期）、前期を（布留1～2）、中期を布留3期～TK208型式期、後期をTK23～TK209型式期、終末期をTK217型式期以降とする。それ以外の時期の表記については、各報告の記載内容を尊重した。

※報告書・文献の略号は、向日…向日市埋蔵文化財調査報告書、京埋概…京都市埋蔵文化財調査概要、京埋研概…京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報、京埋研報…京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告、京市報…京都市内遺跡発掘調査報告、京市分…京都市内遺跡詳細分布調査概報・報告、京市立…京都市内遺跡立会調査概報・報告、京市試…京都市内遺跡試掘調査概報・報告、京市試・立…京都市内遺跡試掘立会調査概報、京埋年…京都市埋蔵文化財研究所年報、府埋概…京都府埋蔵文化財調査概報、府セ概…京都府遺跡調査概報、府セ報集…京都府遺跡調査報告集、府セ報…京都府遺跡調査報告書、長研報…長岡京跡発掘調査研究所調査報告書、大坪2012…大坪州一郎2012「山城地域」『集落から探る古墳時代中期の地域社会－渡来文化の受容と手工業生産－』古代学研究会2012年度拡大例会シンポジウム資料集を示す。

※今回、取り扱った遺跡の多くが長岡京跡の範囲内に入る。長岡京内の調査次数は調査機関の種別に関わらず統一されているが、調査次数が概報および報告の冒頭に記載されない例もあるため、向日市内の調査は長岡京内の左京を示すLの後ろに次数をつけ、京都市内の調査は長岡京内の条坊と調査年度を表記している。なお、特に羽東師遺跡については、報告の時期によって条坊の位置に異動があるが、ここでは原典の表記に従った。

長岡京跡調査だより・115

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成24年6月から9月の例会では、宮域6件、右京域6件、左京域2件、京域外5件の合計19件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。



調査地位置図（1/50,000）

（向日市文化財事務所・（公財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図）

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域 長岡宮跡第489次調査の調査地は北辺官衙西半部にあたるが、長岡京期の遺構は確認されなかった。遺構としては平安時代末から鎌倉時代の溝と柱穴を確認した。溝は一部に護岸を伴うもので、規模の大きな水路と考えられる。柱穴は礫が充填されており、青磁碗や土師器皿が出土した。検出状況等から水路に架かる橋の橋脚である可能性が考えられる。長岡宮跡第491次(元稲荷古墳第9次)調査では前方部前端および南東隅角付近、東側斜面の構築状況を確認するために調査を実施した。調査の結果、前端と東側斜面で第1段斜面および第2段斜面の葺石と基底石を検出した。

右京域 長岡京跡右京第1046次調査では右京第968次調査の西隣で調査を実施し、自然流路を2条検出した。長岡京右京第1045次(井ノ内車塚古墳第5次)調査では、昨年度に引き続き墳丘の形態と規模を確認するための調査をした。後円部の調査では、墳丘の斜面を確認するとともに盛土の構築状況が明らかになった。前方部の調査では、東側の裾部とその外側に分布する埴輪溜まりを確認した。墳丘の裾部は地山を削り出して形成されており、前方部に向かって直線的に延びている。埴輪溜まりは、墳丘に沿って分布している。出土した埴輪はいずれも破片で、原位置をとどめていない。埴輪の種類には円筒埴輪や朝顔形埴輪、石見型埴輪がある。

左京域 長岡京左京第550次調査では、長岡京の東二坊坊間東小路の東西両側溝を確認した。この溝から出土した遺物には土師器、須恵器、土馬がある。その他包含層から古墳時代後期の遺物が多量に出土している。長岡京左京第551次調査では、東二坊大路の東西両側溝を確認した。溝からは長岡京の時期の土師器、須恵器、木製品などが出土した。下層では弥生時代中期の土器や石包丁を含む湿地状の落ち込みを検出している。

京域外 渋川遺跡第15次調査では、長岡京期の掘立柱建物を1棟確認した。調査地は長岡京の復元では「北京極大路」の北側隣接地、京外に位置するが、今回の調査成果により長岡京期に土地利用があったことがうかがえる。また、弥生時代後期の土坑や縄文時代晩期のくぼ地も確認され、当該期の遺物が出土している。

大藪遺跡・大藪城跡では、長岡京の東三坊大路東側溝の延長線上で溝を確認した。寺戸大塚古墳では、平成18年度から古墳の保存を図るための発掘調査を実施しており、今年度は後円部と前方部西側の調査を実施した。後円部の調査では、墳丘裾平坦面と第1段斜面を確認した。第1段斜面の裾部には葺石が良好に残っており、基底石のすぐ外側には円筒埴輪が原位置をとどめた状態で出土した。円筒埴輪は3mおきに5基確認されている。前方部の調査では、墳丘裾平坦面、第1段斜面と平坦面、第2段斜面が確認された。第1段斜面裾部には葺石が残っており、第1段平坦面には礫敷が施されていた。また、今回の調査成果により、前方部西斜面の墳丘裾ラインは北から南に向かって外側に広がることが明らかになった。

(松尾史子)

普及啓発事業（7月～11月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業(体験学習)等の普及啓発活動を行っています。

第27回小さな展覧会

「平成23年度京都府内遺跡発掘調査成果速報」展として、向日市文化資料館を会場に開催しました。平成24年8月18日(土)から9月2日(日)までの16日間の会期で、1,416名の入場者を得て大盛況のうちに終えることができました。なかでも、成果速報展示の美濃山廃寺跡出土のひさご形土製品や覆鉢形土製品、表面に金箔をとどめた埴仏や瓦類、小企画コーナー「貴族から武士へ～もののふ参上～」で展示した平安京左京四条一坊六・十一町出土の輸入陶磁器や古式の常滑甕、さらに京丹波町蒲生野古墳群出土の石釧の速報展示などが注目を集めました。

埋蔵文化財セミナー

平成24年8月25日(土)に第122回埋蔵文化財セミナーを向日市民会館第1会議室で「近年の発掘調査成果速報－第27回小さな展覧会展示遺跡から－」と題して実施しました。



第27回小さな展覧会(於：向日市)



第122回埋蔵文化財セミナー(於：向日市)

京都府教育庁指導部文化財保護課の小宮睦氏と当調査研究センターの引原茂治主任調査員から「国宝清水寺本堂ほか8棟保存修理工事に伴う清水寺境内の発掘調査」と題して、本堂下の基礎構造の解明とその推移について、向日市埋蔵文化財センターの梅本康広氏から「向日市長岡宮跡の発掘調査」をテーマに長岡宮の変遷について、さらに当調査研究センターの大高義寛・松尾史子調査員から「第27回小さな展覧会展示遺跡ダイジェスト－八幡市美濃山廃寺ほか－」の3題の発表がありました。天候にも恵まれ、97名の参加者を得て、盛況に終えることができました。

現地説明会

平成24年9月8日(土)に門田遺跡(京田辺市)の現地説明会を開催し、120名の方が現地に足

を運ばれ熱心に見学されました。

10月7日(日)に平安宮跡・聚楽第跡で現地説明会を実施し、初めて見つかった聚楽第の本丸の石垣を前に、910名の見学者を得ました。

10月14日(日)に木津川河床遺跡にて現地説明会を開催し、明治初期にオランダ人技師デ・レイケにより設計された治水の遺構について一般公開し、168名の参加を得ました。

11月3日(土)に美濃山瓦窯群の現地説明会を実施し、隣接する美濃山廃寺を主な供給先とする瓦窯4基について解説し、77名の方が見学に来られました。

11月10日(土)に石田城跡で現地説明会を実施して戦国時代の山城の一面で見つかった曲輪や堀切・土塁の状況を公開し、108名の参加を得ました。

出前授業

10月17日(水)に、京都府立園部高等学校附属中学校において、「古代・中世の土地開発～南丹波の遺跡調査から～」と題して南丹市野条遺跡や室橋遺跡の成果をもちいて出前授業を実施しました。

関西考古学の日関連事業

9月～11月に当調査研究センター研修室において「夏の考古学体験講座・秋の歴史体験講座」と題して4回にわたり体験型の講座を実施しました。第1講座(9月1日「木筒をつくる」20名参加)・第2講座(9月2日「瓦づくりの秘密」20名参加)・第3講座(10月13日「万葉木筒を写す」8名参加)・第4講座(11月24日「戦国時代の城づくりと武将たち」16名参加)で、合計63名の参加者を得て好評のうちに終わりました。

(伊賀高弘)



門田遺跡現地説明会風景(於：京田辺市)



平安宮跡・聚楽第跡現地説明会風景(於：京都市)



木津川河床遺跡現地説明会風景(於：八幡市)



美濃山瓦窯群現地説明会風景(於：八幡市)

センターの動向

(平成24年7月～10月)

月日	事	項
7 6	第45回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：長岡京市)	水谷壽克調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐、岸岡貴英調査第1課課長補佐出席
17	第1回遺跡検討会【山崎津跡】(於：当センター)	
19	長岡京跡(長岡京市)発掘調査開始	
20	平成24年度第1回公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター中期経営目標等検討会(於：府庁)	
24	京都府中世城館跡調査委員会	岸岡貴英調査第1課課長補佐出席
25	長岡京連絡協議会(於：当センター)	
30	成相寺旧境内・難波野遺跡発掘調査委員会	石井清司調査第2課主幹出席
8 6	美濃山廃寺ほか(府道)(八幡市)発掘調査開始	
10	人権大学講座(於：京都市)	高野陽子調査第2課調査員受講
18	第27回小さな展覧会開催(～9/2)	
21	平成24年度教育庁役付職員人権問題研修講演会(於：京都市)	水谷壽克調査第1・2課長、今村正寿総務課係長、小池寛調査第2課課長補佐出席
	石田城跡・由里古墳群・石田谷古墳群(与謝野町)遺跡見学会(参加者26名)	
22	平成24年度教育庁役付職員人権問題研修講演会(於：京都市)	石井清司調査第2課主幹、伊野近富次席総括調査員、竹原一彦・戸原和人・中川和哉主任調査員出席
	長岡京連絡協議会(於：当センター)	
23	役員等協議会(於：当センター)	
30	長岡京跡(長岡京市)発掘調査終了(7/19～)	
9 1	関西考古学の日関連事業：夏の考古学体験講座第1回「木簡をつくる」(於：当センター)	講師：松尾史子調査第1課調査員(参加者20名)
2	関西考古学の日関連事業：夏の考古学体験講座第2回「瓦づくりの秘密」(於：当センター)	講師：石井清司調査第2課主幹(参加者20名)
5	平成24年度第1回埋蔵文化財担当職員等講習会(於：広島)	水谷壽克調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐出席(～9/6)
7	人権大学講座(於：京都市)	加藤雅士調査第2課調査員受講
8	門田遺跡(京田辺市)現地説明会(参加者120名)	
12	平成24年度第1回人権教育(教育局別)行政担当者等研究協議会(於：乙訓総合庁舎)	杉江昌乃総務課課長補佐、小池寛調査第2課課長補佐受講
13	出屋敷遺跡(木津川市)発掘調査終了(5/24～)	
14	第2回遺跡検討会【美濃山廃寺】(於：当センター)	
15	ふるさとミュージアム山城文化財連続講座「京都発掘だより2012」(於：京都府立山	

- 城郷土資料館) 筒井崇史調査第2課調査員講師派遣
- 9 15 退職職員辞令交付(別掲)
- 19 人権大学講座(於:京都市) 筒井崇史調査第2課調査員受講
- 24 平成24年度人権研修会(京都人権啓発行政連絡協議会)(於:京都市) 杉江昌乃総務課課長補佐受講
- 下水主遺跡ほか(城陽市)発掘調査開始
- 26 長岡京連絡協議会(於:当センター)
- 10 1 採用職員辞令交付(別掲)
- 2 中尾芳治理事平安宮跡・聚楽第跡(京都市)現地指導
- 3 上原真人・井上満郎各理事平安宮跡・聚楽第跡(京都市)現地指導
- 5 人権大学講座(於:京都市)伊野近富調査第2課次席総括調査員受講
- 7 平安宮跡・聚楽第跡(於:京都市)現地説明会(参加者910名)
- 12 人権大学講座(於:京都市) 松尾史子調査第1課調査員受講
- 増田富士雄理事平安宮跡・聚楽第跡(京都市)現地指導
- 13 関西考古学の日関連事業:秋の歴史体験講座第1回「万葉木簡を写す-万葉仮名で木簡をつくる-」(於:当センター)講師:伊野近富調査第2課次席総括調査員(参加者8名)
- 14 木津川河床遺跡(八幡市)現地説明会(参加者168名)
- 17 人権大学講座(於:京都市) 黒坪一樹調査第2課専門調査員受講
- 園部高等学校附属中学校出前授業「古代・中世の土地開発～南丹波の遺跡調査から～」(於:園部高等学校附属中学校) 高野陽子調査第2課調査員講師派遣
- 18 外郭団体等実地調査(於:当センター)
- 乙訓地域応急手当講習(於:向日消防署) 高野陽子・筒井崇史・加藤雅士調査第2課調査員受講
- 24 長岡京連絡協議会(於:当センター)
- 26 人権大学講座(於:京都市) 増田孝彦調査第2課主任調査員受講
- 平成24年度恭仁宮跡調査専門委員会 岸岡貴英調査第1課課長補佐出席
- 29 大川遺跡(舞鶴市)発掘調査開始
- 31 人権大学講座(於:京都市) 村田和弘調査第2課調査員受講

(別掲)

- | 月日 | 事 | 項 |
|------|-----------------------|---|
| 9 15 | 田代弘調査第2課次席総括調査員退職 | |
| 10 1 | 辻本和美調査第2課副主査採用(雇用期間付) | |

編集後記

今年はいつまでも暑い夏が長く続きましたが、相次ぐ台風の上陸や、局地的な豪雨の襲来など、例年になく自然の猛威を感じさせました。それでも季節の進行は順調に推移し、周りはずっかり冬の景色となりました。

ここに、情報119号が出来上がりましたので、お届けします。

本号では、実りの多い平成24年度事業の概要を紹介するとともに、共同研究の事業報告、古墳時代の葬送儀礼にかかる論文を掲載いたしました。

(編集担当 伊賀)

京都府埋蔵文化財情報 第119号

平成24年12月31日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER